女鑑

明治廿七年十二月十三日發行

第七十六號

東京國光社

女鑑第七十六號目次

岸竹子



女鑑

技能の同からざるは自然なり

人の天性は、各自、其の好む所を異にするあり、其の能くする所を異にするあり。總て、一樣のものとすることを得ざるなり。是、自然に、其の生れつきに存するものなれば、強いて、之を矯むること能はざるなり。然るを、必、之を同一にせんとするは、思はざるの甚しきものとやいはまし。

故に、唯、能く、其の技能を長養して、其の人と同からんことを求めざるを、誠に、能く、其の性を知ると謂ふべし。如何にとなれば、人々、皆、其の技能を異にするを以て、世上百般の事、皆、其の宜を得るものなれば、必、分業專門に

て、互に、相利益し、國家の務を成すを、能く其の道を盡くすと謂ふなり。

されば、人を敎ふるにも、自、勉むるにも、必しも、人に同かかんことを願はば、偏に其の技の長ぜんことをのみ求むべきことなり。學術の中にありてすら、或は、文章に妙なるもあり。或は、詠歌に巧なるもあり。或は、歴史に精きもあり。或は倫理に詳なるもあり。或は、理學に明かなるもあり。或は、經濟に長ずるもありて、均く學者と稱するも、其の能くする所は、猶、此くの如く、各、異なるものあり。況んや、其の業とする所の異なるに於いてをや、彼の工藝技術に於いて、其の技能を異にするは、抑、亦、甚しきなり。或は、音樂に巧に、或は、繪畫に妙に、或は、裁縫に、刺繡に、造花に、熟するが如き蓋、各自の長ずる所あり、皆之を兼て能くすべきに非ざること、言を待ずして明かなり。

今日の世に在りては、殊に、専門の技能を長養するを要すべきは、夙に、識者の論ずる所にして、世、亦、其の風に向ふの日、將に久しからんとせり。是、世人が、天性を枉げずして、之を養成し、其の特得の技能を啓達するの易くして、且、利あるを知るに由るものにして、實に、喜ぶべきことゝ謂ふべきなり。然れども、利を知るの弊、未、其の害を察せず、世人の風尚をして一に、利を喜び、末を逐ふに傾かしむるに至れるは、是、亦、識者の、大に、痛嘆して措く能はざる所なり。之を要するに、異なるべき所と、同かるべき所との區別を明かにせざるの致す所なれば、世人宜、此の際を察すべきなり。技能の異なるは、異なるを可とす。唯、其、人の精神の措き所の如きは、千萬人皆同一にして、誠意正心を以て、此の天性を盡くすことを共にせざるべからず。諸孃、能く察し給ひね。

論說

女流文學者の傳をよみて

大町芳衛

父母、堂にあり、兒女、膝をめぐり、夫唱へ、婦和して、和氣靄然として、一家團欒の外にあふるゝものは、まことに、人生の至樂なり。されど、末の露、もとのしづく、おくれさぎだつ世の例にもるゝ由なく、親を失ひては、風樹の感、いかに切ならむ。子をさきだてゝは、倚門の情、いかにかひなからむ。あかで別れしおもかげを、いつの世にかは忘るべきと、靜女のうたひけむ。早く夫に別れて、一生かたく操を守れる女こそは、わきてあはれなれ。

われ、古來文學に名ある女流の傳をよむに、その境遇、おほく不幸ならぬはなし。まづ、日本第一等の女流文學者ともいはるゝ紫式部は、早く、夫を失ひて

上東門院につかへぬ。源氏物語は、實に、其寡居の心やりにつくりたるものなりといへり。

枕草紙の著者にして、文筆、紫式部と雄を爭ふ清少納言も、そのつかへまつれる主みまかりて、一生、轗軻をきはめ、老後、廢屋の下に住ひけるを、少年のあなどりければ、駿馬の骨を買ふもののあるを聞かずやと、叱りたるにても、其やつれたるさまは、知られぬ。かの有名なる十六夜日記は、寡居して、夫の遺兒の相爭へるに苦しみし阿佛尼の筆になれり。亂世にありて、よく文學の光を放ちたる武田勝頼滅亡記も、夫に別れて、寡居したる理慶尼の作なり。降りては、俳句を以て有名なる加賀の千代、田捨女の如き、皆早く夫を失へり。近くは、歌に妙を得たりし大田垣蓮月の如きも、早く夫をうしなひしにあらずや。その外、一々、

數ふるに遑あらず。ミューズの神は、一に、不幸を好みたまへるかと疑はるゝばかりなり。

かく、佳人の薄命なるは、まことに、憐れむに堪へたれども、其薄命の境遇、やがて、文學に力をつくすべき好き機會を與へ、文學に力をつくすべき好き機會、やがて、婦德を全うするに足るべき安身立命の地をさづけたるなり。抑、女子の本分は、家を治め、子を育つるにあり。文學に力をつくして、芳名を千載に傳ふるは、其本分にあらず。されど、世は定なきものなり。一旦、あかぬ別にあひて、不幸薄命の境に沈淪するときは、女子たるもの、何を以てか安身立命の地を得むとする。英雄豪傑の士といへども、轗軻失意の時にのぞみては、或は悲歌痛飲して心をやるものあり。或は山林に高蹈して、悶を排するものあり。わけ

て、女子は感情ふかきものなれば、失意のあまり、浮屠氏の邪説にまよひて、あたら、ぬばたまの黒髪をそりこぼち、木像の前に、うなづきねぎて耻とせざるもの少からず。はては、耶蘇教とやら、聞くもいまはしき邪教を迷信し、會堂の中に頭をさげて十字架を拜み、男女入りみだれて、讃美歌といふものをうたふなど、神州女子の本分をわすれて、異端邪教に、蠱惑さるゝこと、まことに、かたはら痛きことのかぎりなり。

思ふに、あさましの大和の道をふみたがへて、ことさへぐ、とつ國ぶりの邪説に入るは、薄命の境遇の然らしむるもの多きものから、畢竟するに、他に安身立命の地あることを知らざるによれり。さればとて、女子は、酒をのみて、安身立命の地を得べきにあらず。山林にのがれて、安身立命の地を得べきにもあらず。

唯、文學こそは、最、よく女子に適する安身立命の地なれ。和歌、文學の德は、いまさら言ふまでもなし。古今集のはしことばに、「力を入れずして、天地をうごかし、目にみえぬ鬼神をもあはれとおもはせ、をとこ女の中をもやはらげ、たけきものゝふの心をもなぐさむるは、歌なり」といへるは、決して過言にあらず。明の詩人、高靑邱の句に、「朝吟、其飢を忘れ、暮吟、不平を散ず。其苦吟の時にあたりては、兀々として酲を被るが如し。頭髮くしけづるゝ暇あらず、家事營むに及ばず、兒啼きて憐れむことを知らず、客至りて迎ふることを果さず。回也の空しきを憂へず、猗氏の盈つるを慕はず、寛褐を被るを慙ぢず、華纓を垂るるを羨まず、龍虎の苦んで戰鬪するを問はず、烏兎の忙しく奔傾するゝ管せず」といへるも、偶然にあらず。あはれ、文學の德は、かくのごとく尊く、文學者の

心事は、かくの如くやすらかなり。安身立命の地を求むる天下の才女、何ぞ此を以て彼とかへざる。

文學は、情を主とするものなり。而して女子最情に富めり。女子の力を文學に盡すは、能く其性に適したるものといふべし。試よ、我國の文學史の中より、紫式部、清少納言、小野小町、和泉式部などを除き去らば、日本文學は、一半の光彩を失はむ。されど、世をすて、親をすて、夫を棄て、子を棄てゝ、力を文學につくすべきにあらず。たゞ、文學に向ひて、安身立命の地を求むべきのみ。何をか安身立命の地といふ。曰く、精神的の快樂を知りて、物質的の快樂に局促せず。失意の境遇に陷りて、さもしき心を生ずることなく、天を樂しみ、分を守り、德をつみ、操を堅うして、婦人の本領をたて通すこと、是なり。かくの如き

覺悟は、心中ふかく信ずる所のものあるにあらざれば、得べからず。耶蘇教は不可なり、佛教もよろしからず。日本の女子は、唯、まさに淺香山の奥ふかく敷島の道をふみわけて、其心をかため、其氣を高くし、其德を修めて、以て、世の悲酸、苦痛、失望の境遇に逢ふも、悠然として自安んじ、かたく苦節を守りて、生死、誓て女子の品位を墜さゞらむことを期すべきなり。

耶蘇教は、我國體と衝突するもの多き故、余は、日本人として之を排斥するものなり。佛教は、我國に入りてより千餘年を閲し、弘法、傳教、親鸞、日蓮等の手によりて、幾分か其原形を變じて、我國の風俗に融化せられたるものありて、固より耶蘇教とは同日の談にあらねども、國體を扶殖すべきものにはあらず。神ながらの教のあることとなれば、神州の人民、何ぞ之に向て安身立命の地を求めん

や。されど、古來節婦が往々頭をおろせるは、必しも佛法を迷信せるにはあらざるものあり。即、年若くして寡居する時は、再嫁をすゝめらるゝなど、よろづにつけてわづらはしきこと多く、爲に節操を破らんとする場合あれば、頭を圓くして、以て節を守る決心を示さんとするの意にいづるものあり。かくの如きは、手段は非なれども、其操を守らむとするの心はあはれむべし。されば、其心を取りて、其手段をば轉じて文學に用ゐなば、則、其可なるに庶幾からむ。

終に臨みていふべきは、文學も、一歩を謬れば、驕奢淫靡の風を生ずることとなしとせず。藤原時代、才女の品行の、多く修らざりしを見て、以て殷鑑とすべし。其弊に染むと、染まさるとは、心を用うるの如何にあり。而して、其德の高大なるに至ては、遂に得て沒すべからず。あはれ、才情德行兩ながら備はりし

紫式部を以て、異數となすことなかれ。眞正の文學の人を化するもの、自此の如くならざるを得ざればなり。

女子教育に就きて（四）

女子の家庭教育に就きての父母の心得（續）

山崎庚午

然れども、吾人は、女子の父母に向つて、漫に、偏屈、固陋、鳥を籠に養ふ如き教育法を、取れよとにはあらず。女子は、男子と異なりて、疾走、奔馳の行を以て、衆人、廣座の間に出入して、諧謔、談笑すべきものにあらざれば、勢、家居、閑然の時間多からざるを得ず、此時間には、勿論、精神と身體とを爽快、健全な

らしむるの方法を要することにて、こは、寔に、父母の、擇んで與ふべき所たり。たゞ、之を慰め、之を樂ましむるに、其道を以てせず、徒に、賤劣の技藝を手にせしめ、猥に、卑猥の事物を眼に觸れしむる如きは、取らず。

この故に、女兒の閑時を利用して、一方には、其精神と身體とを健全、爽快ならしむると共に、他方には、其精神を誘ひて、高尚の方向に、導くべき方法を講せんことを、父母の最大任務といふべし。即、父母は、女子の精神を慰め、身體を壯健ならしむるに、高尚の遊技、藝能を以てせざるべからず。先、閑時に、女子が、己の心を慰め、意を樂ましむべきものは、遊藝と、讀書と、散歩なるべし。女子の遊藝には、固より、高尚のものを撰ぶべきは勿論、彼の三絃、又は、淨瑠理の、卑猥、賤劣なる如き、自、之を爲さゞるのみならず、又、己の耳にだも觸れしむ

べきものならず。琴を彈じ茶を立て、花を生くる等は、女子の閑時を慰むるに、最良の方法なるべし。一旦、高尙の音を耳にし、風雅の技を手にするに當つては、其心氣の赴く所、亦、從ひて、高優なるべく、心氣、すでに高優ならば、その爲す所、行ふ所、一として、優美ならざるなし。爲す所、行ふ所して、優美ならば、女子の眞善美、存してこゝにあり、敎育の實効、擧げて見るべし。

女子閑時の讀書に、多く、小說を以てするは、非なり。尤、小說のうち、時に、勸善懲惡の實を擧げて、敎戒、訓化の功あるものありと雖、これ、極めて稀に見る所にして、多くは、淫猥、拙劣、讀むに堪へず、見るに足らず、殊に、近世の小說に至りては、悉、皆、佳人、才子を骨として、卑猥の劣情を肉とせるものにあらざるなし。之を讀誦して、高尙の思想を得べからざるのみならず、却りて、野

鄙の精神を増長せしむるのみ。然らば、女子閑時の讀書には、如何なるものを以て、可とすべきかといふに、吾人は思ふ、彼の烈女の傳記、才女の逸話、教草、などの類こそ、適當なるべけれど。烈女の傳記を見て、其節操に感じ、才女の逸話を見て、斯くならましと思ひ、晝夜、これを心がくるに至らば、自然と、女子の心意も高く、行爲も優なるべし。茲に於て、世の教育者が、幾多の空想を以て、駄辯、空言、喋々する所のもの、期せずして之を得べきなり。

女子の散歩、運動は、其身體を健全にし、精神を爽快ならしむるの最大勢力なり。然れども、女子の散歩、運動は、男子のと異りて、なるべく、閑散の地、優勝の境を求めて、父母、又は、親族と共に、新鮮の空氣を吸ひ、勝美の風景を眺めて、精神と身體とを養ふべし。又、運動法にも、男子の如く、激烈のものを取

ずして、温和なる、女子相應のものを撰ぶべし。彼の、古くよりあり來れる、球つき、羽子つきの如きは、少女に取りての、善き運動法なり。然れども、是も、男子などうち混りて、さゞめきつゝ、興ずるはいと悪しゝ。

今世の女子は、散步運動を取るもの少し、偶、これあれば、藥師の緣日、觀音の祭禮、街頭の夜店、などのあたりに、逍遙するのみ、何ぞ、高尙の散步を知らざるの甚しき。高尙の散策は、又、高尙の快樂の一にして、高尙の快樂は、人を誘ひて、漸く、眞善美の域に達せしめんとするものなり。

更に、いふ、世の敎育者よ、徒に、空理を說きて、空想を畵きて、兒女、敎育の實効を擧げんとするを止めよ。須、先、その平素の行爲と、習慣とによりて、之を自然的に養成せよ。敎育者、君等が、高壇の上、卓机の傍、舌端火を出し、

腕頭風を起して、企望したる教育の實効は、寔よ、家庭父母の、一日の注意にだも、如かざるものなることを知らずや。

女子處世論（十三）

三輪田眞佐子

第十二　精神の修養

人の言ふことと、及び、行ふことは、悉、精神の顯はるゝものに外ならず。故に、苟、その言行をして、邪惡に陷り、柔弱に流るゝことなからしめん、と思ふものは、須く、精神を修養して、不撓不拔ならしむべし。若、精神を修養せさらんか、必、人生の目途を指示する、見識定まらさるべし。則、一定の見識なうして、世路を行くは、さながら、燭なうして、暗夜を行くが如し。げに危いかな。

わきて、女子は、貞操、孝行、廉耻、及び、博愛等の道德を實踐せざるべからざるをもて、誠に、任重うして、道遠しところ言ふべけれ。されば、堅固の精神を有たざる女子は、いかで、女子の本分たる、重任を盡し得べきかは。

おかるゝ、今日、わが婦女の情態を見るに、槪、精神の修養を欠くめり。見よ、婦女子は能く泣き、能く笑ふなり。されど泣くべきに泣き、笑ふべきに笑ふ者は少し。亦、能く憎み、能く歡ぶなり。されど、憎むべきを憎み、歡ぶべきを歡ぶは希なり。畢竟、大方の婦女は、この廣大なる宇宙に對して、何等の觀念なく、この靈妙なる人生に就て、なんらの辨識なく、唯、空々寂々として、年月を過すらし。されば、彼等は、いかでか國難、あるは、人災に逢はんも、正義を踏むを得ん。そは、正義を踏みて恐れざらんには、是非とも堅固の精神を有ちて、

動すべからざる信向を要ずればなり。彼の「くろがみのみだれたる世ぞはてしなきおもひにきゆる露の玉の緒」と歌うて、良夫と難を共にして斃れし、武田勝賴の妻の如き精神の婦人、今の世に幾人かある。或は、身を血烟に化して、親の危を救ひ、兼ては、夫を辱しめざりし袈裟御前の如き、あるは、我心石にあらず、轉すべからずと思ひ定めて、無道の夫に事へて厭はざりし、莊姜の如き女子、今日果して多きか。すべて、人は、いかに富貴ならんも、將、學識あらんも、各、分限相應に、所謂、浮世のほだしは免れがたかるべし。されど、堅固の精神をもつものは、之に處して、正義に違はず、唯、天命に從ひて、安樂の生涯を遂げ得べし。

おしなべて言ひ難かたからむも、目下の女子教育は、皮相上の藝能にのみ、馳す

るものゝ如し。聊、理化學の作用を知り、亦、和漢洋の文學を讀み得んも、そればかりにて止まんか、精神の修養に、毫だに稗益なかるべし。むかしの女子は、今時の如き、女學校の設なかりけれど、嚴粛なる家庭敎育ありて、精神の修養をなしゝかば、好し、完全の精神敎育はなし得ざりきとも、女子心得の大様は知りゐたりき。さるに、方今は、家庭制度亂れて、敎育を學校に一任せり。しかして、學校の弊として、文字上の區々たる知識の傳授に流れ、大に憂ふべきに、剰この頃は、今昔の時勢の情態を比較せで、妄評するものあり。いはく、昔はいろは敎育に過ぎざりしに、なほ、善良の女子ありけり。云々と、遂に、天下將來の盛衰強弱に影響すべき、女子敎育を忽にして、單に、女子には、細藝及び末能のみを敎ふれば足れりと、以て精神の修養を顧ざる傾向を生ぜり。あはれ、これ

なん、日本女子をして、その地位を卑うし、その品格を下らし、全、傀儡と同等ゝ化して、人間らしく世の處する能はざらしむるものなる。敢て問はん。傀儡を母とし、傀儡を妻とし、將、傀儡を姉、あるは、妹とせんと願ふものは誰ぞ。おのれ、去月、敎育家何某ぬしに邂逅せり。ぬしは博學の聞高く、わきて、敎育學者として、亦、敎育實驗家として、有名ゝおはすをもて、兼て、女子敎育のことなど、きかまほしう思ひしゝ、幸、おのれに告げてのたまふやう、方今の女子、誰もともに語るに足るものなし。そは、理想心ゝ乏しき故にやあらん。元來、敎育の要は、人の足らざる所を補ふにあれば、先輩の女子は、女敎を全うせん男子もがななど言はで、一切の依賴心を去り、みづから、後進の女子を率ゐて、その精神の敎練を勤むべしと、實に理あることにこそ。信ゝ、女子たるも

のは、夙に、その精神を修養せざらんか、立ちて、世路の難を排し、慈悲、信實、及び貞操ある女子となり、もて高尚、潔白の生活をなし得ざるべし。蓋、如何にしても、精神を修養するかとの問題は、異日、教育論として述ぶる機會もあらん。今は、唯、堅固なる精神は、處世に欠ぐべからざるものなりと悟らば足れり。

史談

岸竹子　大町桂月

支那二十六美人の中に數へられたる花蕊夫人の詩に、「君王城上竪二降旗一、妾在二深宮一那得レ知、十四萬人齊解レ甲、也無二一箇是男兒一」といへるは、げに、言ふ甲斐なき武夫を罵倒して、頗、こゝろよけれども、古來、我國の婦人の、一旦事あるに臨みては、自、眉尖刀を提げて、軍馬の間に馳驅する勇氣あるに比ぶれば、固より

日を同じうして語るべきにあらず、支那人は女子のみならず、鬚眉の男子も、口にこそ、「願くは、貔貅十萬の兵を得て、犬戎の巣穴を一時に平げむ」など、大言を吐けども、戰にのぞみては、心臆し、氣くじけて、唯、退くことを知るばかり、蠻夷犬戎など、輕蔑したる種族の爲にうちやぶられて、おぞくも、城下の盟をなし、中華と稱して、自、誇りたる祖宗百戰の山河を、あたら、蠻夷の手に委ねて、耻とせざるならはしなれば、このたびの日淸戰爭に、我日本の軍の連戰連勝なるは、固より怪しむに足らぬことぞかし。そも、支那の國は、我國よりは數十倍もひろき土地を有し、其人口、其兵士も、これにつれて、我より多きこと、數十倍なれども、かく、我軍の向ふところに敵なきは、一は支那兵の弱きによるものから、一は我兵の強勇無雙なるに依らずんばあらず。我國は、古來、武を以て國をたてたり。されば、「海ゆかば、みづくかばね、山行かば、草むすかばね、大君のへにこそ死なめ」といへるは、げに、國民一般に通ずる心情にして、世々、其美をなせる事跡は、萬古、竹帛を照せり。そのをゝしき心は、男子のみに止まらずして、女子にも備はり、烈婦勇女の多きこと、絶えて、萬國に其比を見ず。かけまくも畏きことながら、神功

皇后の三韓を征服せさせたまひし功業をはじめまつり、巴御前の如き、板額の如き、富田信高の妻の如き、事あるに臨みて、勇往奮戰、萬死を辭せざりしもの、擧げて數ふべからず。近くはまた、勇女、岸竹子を得たり。

戊辰の役、會津藩の如きは、朝敵の名を被りたれども、一天萬乘の天子に對して弓を引かむとしたるにはあらで、薩長二藩が朝廷を挾んで私をなすものと誤解して、此二藩を倒して君側を淸めむと欲したるものなれど、錦の御旗にいむかひたる罪はあれど、其心は憐まざるべからず。殊に、藩士の其事ふる所に盡くしたる一片の忠義は、得て沒すべからざるものなり。彼の飯盛山に腹を屠りし白虎隊の十六少年の如きは、今日に傳て、美談となすにあらずや。岸竹子の如きも、また、婦人の身にてありながら、萬死、其君につくして、芳名、白虎隊の少年と共に世に傳はるに足るべき勇女といふべきなり。

竹子は、會津藩の士、岸七郎といふ人の妻なりけり。薩長の兵の攻め來りし時、七郎は百瀨某と共に、一隊を率ゐて越後口に赴きぬ。竹子も、座して國難を見るに忍びずとて、夫と別れて、本軍につれて、彈藥運送の事をつかさどりけるに、薩長の

勢、破竹の如く、賴に思ひし猪苗代さへ攻め落されて、薩長の軍、今は瀧澤峠まで押し寄せたり。時に、明治元年八月廿三日、會津藩の士及び脫走人の人々は、力を盡くして、茲を先途とたゝかへども、衆寡敵せず。しどろ、もどろになりて逃げゆくさまの見苦しさ、彈藥運送をなし居たりし竹子は、見るに見かねて、腰なる一刀、すらりと引拔き、軍中に加はりて、ふみとゞまりて戰ふに、鬒髮、風に亂れて、綠雲、空に舞ひ、くれなゐの唇、かたく閉ぢて、柳の眉さかだち、滿身の力を込めて、電光石火とひらめかす烈女の鋒光に、近寄る五六人の敵、たちまち斬倒されて、迸りいづる鮮血、地上に流れて聲あり。此さまを見て、會津の兵、一時はげまされて、引きかへしたれど、薩長の兵、新手を入れかへて、攻め寄するに、またも浮足立ちて、七八町ばかりにげ延びける處に、ゆくりなくも、一隊の兵、横手よりあらはれいでぬ。これなん、さきに越後口に向ひたる百瀬某の一隊なりける。會津の敗兵もこれに勢を得て、共に力を合せて、尾擊する薩長の軍を追ひ退けて、軍氣大に振ひ、再來らば、唯、一戰に蹴散らさむと、勇みに勇みて、待ちかまへたり。

百瀬は、竹子を見て、いたう驚き、さても、御身は此におはするか。某は、六月以

來、越後に在りて、數度の戰に、からうじて、一命を助かりて、茲に來りぬ。いたはしや、御身の夫、七郎殿は、去月十日の戰にあへなく討死し給へり。その屍は、山陰に埋めて、志るしばかりの石を立置きぬ。紀念の爲にとて、此短刀をもちて歸りけるが、我とても、明日をも知らぬ露の命、せめて、これを御身に渡して後に死なんものと、思ひし甲斐ありて、今茲に、ゆくりなく、對面したることのうれしさよ。夫のかたみ、いざ、受取り給へとて、短刀をさしいだせば、竹子、かしこみて、押いたゞき　越後口の戰は、いとゞはげしかりきと聞き侍りしを、かゝる中にも、夫の死骸を葬られ、短刀さへ持ち歸られしは、此上もなき御厚情、謝しまゐらするに言葉もいで侍らず。この上の御情には、夫の打死のさま、ひと通、聞せ給ひてよとて、涙一滴こぼさぬ心のをゝしさ。さればにて候。御身のいはれし如く、越後口の戰は、いつも、てづめの戰なりしを、別けて、去月十日の戰ははげしかりき。七郎殿を某とは、逞兵五百をひきつれて、陣が峯にて、薩長の大軍をくひとめ、終日、敵兵をなやましけるに、思ひもよらぬ横合より敵兵あらはれいでゝ、前後より攻め來りければ、味方は不意をうたれて、討死するもの、數を知らず。されば、七郎殿は、

一歩も退き給はず、自、陣頭にいでゝ、味方を指揮して戰はれけるが、銃丸、雨の如くそゝぎ來りて、面をむけむやうもなく、七郞殿は、遂に胸をうち拔かれて、無念と一聲、敵の方を睨みて、息絶え給ひきなど物語りけるに、若松城下に當りて、大砲小砲の音、すざましく聞えければ、すは、敵は已に城下まで押しよせたりと覺ゑたり、猶豫すべきにあらずとて、百瀨は令を傳へて、長蛇の陣をつくりて、いちはやく、城下に押し出しぬ。竹子もつゞけり。やゝしばらくして、七日町に入らむとするほどに、薩長の兵、すでに一の廓を乘りとりて、勢、破竹の如くなれども、城中よりも打ていでゝ、女、子供にいたるまで奮戰しければ、薩長の兵も力つきて退きぬ。しばらくして、また、新手を以て攻めければども、勝負なく、城下をやきはらひて引わけ、其夜は、戰なくて明けぬ。翌日、朝まだきより、また押寄せ、追手搦手一時に攻めたてゝ、砲聲とゞろきわたりて、天地も崩るゝばかりなり。天寧寺山の要害さへ、薩長の兵にとられて、城は、もはや、禦ぎがたく見ゑけるに、白河口に出でたりし一隊、歸り來りて、越後口の一隊と、瀧澤峠の敗兵と共に力をあはせて、死を決して戰ひければ、兩軍の死傷、いくそばくといふことを知らず、黑烟天

に漲りて、咫尺をわかざる中に、ぬきつれたる劍、火花を散らして、きらめきわたり、寄せてはかへし、かへしてはまた寄せ、奮戰苦鬭して、積屍山をきづき、流血杵を漂はすばかりなりしが、會津の兵、次第にうちやぶられて、百瀬もあへなく打死てけり。明日をもまたぬ露の命といひし言葉末、終らざるに、その身は、早くも龍門原上の朝露と消えうせぬ。せめては、その屍を葬りて、夫の屍を葬りくれし恩誼に報いむとて、かよわき女の身なれば、思ひ凝つたる一念つよく、己より遙大なる大兵の死骸を脊負ひて、亂軍の中を逃げのびてゆく程に、兵火、行手をふたきければ、これをも避くるに遑なく、火を踏み、烟を冒して通りぬけ、七日町より郊外にいでゝ、岩根こゞしき山のふもとまで來りけるに、追ひくる敵なければ、百瀬の死骸をおろして一息つき、如何にして埋めむと思案しけるに、倒れかゝりたる一もとの木ありければ、これを引きぬきて、其跡を少しばかり堀りて、やがて、死骸をぞ埋め終り、これにて、夫の爲に恩を報いぬ。最早、思ひのこすことなしとて、衝立上りて、城の方を望めば、火焔、天に冲して、はや、落城せるさまなり。この身も、また、深き手創を負ひたれば、今は是迄なりとて、夫のかたみの一刀、手に取るより

早く腕腹につき立てゝ、城の方をふし拜みつゝ、「數ならぬ我身ながらも亡夫の、いさをしつぎて名こそ殘さめ」といふ一首の辭世のうたを殘して、あへなく、息はたえてけり。芳紀、二十八とぞ聞えし。

あはれ、しきしまの大和の國に生れいでたる女子は、みな、かゝる勇氣こそ、あらまほしけれ。開闢以來、我國は武を以て國をたてたり。今より後も、生存競爭場裏に立ちて、「世界萬國と雄を爭はんとせば、ますます奮てひ、武を以て國を立てざるべからず。されば、女子たるもの、戰場にいづることこそはなかるべしといへども、常に尙武の心を勵まして、家庭敎育の際、きはめて熱心に、きはめて面白く、未來の國民たる幼童に向ひて、武備の急なるを說き、名譽ある古の勇將の傳を語りて、これが尙武の氣象を皷舞し、勇氣勃々として、自ら禁ずること能はざらしめむことをつとむべきことにこそ。つらつら思ふに、太平の世にうまれいで給へる姬君たちは、凜凜たる刀の光を見てだに、肌に粟を生じたまふものなしとせず。なべて女子は柔和を旨とすべきものから、國の母たる人にして、かくまで、怯懦なるに至らば、國家の前途、大に憂ふべきものあらむ。我日本は武を以て國をたてゝ、今日にいたれり、今

日より更に武を以て千代八千代までいたらんとする國なれど、女子たちも、既往の歷史に鑑みて、柔和を主とするのあまり、誤りて怯弱無氣力に陷らむことを避け給ふべきなり。

貞婦錦女

湯島順

元錄の頃にやありけむ。茜さす吉備の國は、瀨戶の夕浪靜に、曙うるはしく、西行法師もこゝに來ては、橫手を打ちしといふ牛窓の島前に、森村何がしといふありけり。初は漁獵を業とし、手づから櫓をとりて、朝のなぎに船出し、瀨戶の冲に網引きては、夕の風を眞帆にうけて港にかへり、得たる魚どもを市に鬻ぎて代にかへ、よりてやう〱、細き煙を鹽風に靡かせしが、げに稼ぐに追ひつく貧乏神なきたとへに洩れず。年月重ぬるに從ひて、やう〱富み榮ねゆき、遂には、此里に並ぶ家なき程の物もちとぞなれりける。されど、板一重または底ひを知らぬ海上に、波風を凌ぎて纜手ぐり、網ひきする危き業の、今更にうたてくなりけれど、杉の葉を門の標に、小島酒といふを釀造て商なひけるに、正しき頭には松尾の神も宿らせ給ひけ

ひ。朝夕をわかず。上戸も下戸も集ひ來りて、呑口の泉絶ゆる間なく、薦包運ぶ牛車の音は浦風に響きて、津々浦々に、小島酒の銘見ぬ所なかりける。斯く富み榮えて、足はぬ事なきが上に、夫婦が中になしたる一人の娘、嬰兒總角の程も過ぎて、やう〳〵島田髷の年頃になりては、花の盛の匂高く、名を錦といへれば秋山の哀も深し。人々浦人の子には、やさしといひはやしけり。夫婦は、掌の中の玉と愛で寵しみ、浦人の子の鄙びたるなど言はれんことの悔しさに、母親の才覺にて、京より御所方の女房の、諸禮作法心得たるを呼び迎へて、萬事都風を學ばせけれど、鄙びたる事去りて、愈らうたく光る許りなりけるが、好色者の物思ひの種となりて、大幣の引手あまた、彼此の忍び文の一つ二つも、積りては千束となり、陸奥の錦木の古事もおぼえけれど、錦、心正しき女なれば、漢竹のうきたる節なく、返事だにせで暮しけり。あまた緣をいひ入るゝものあれど、兩親は、一人の娘なれば、三國一のよき婿がねもがなと、あちこちと求めけるに、我住める里にはなくて、阿波國德島の町に思ふまゝの能き人ありて、約束整ひ、吉日を撰りて、文月七日の、空は彥星織姬一年の逢瀨なる、銀河光り輝く夜に妻迎さゝめきて、丸に花菱の紋提灯は鳴門

の浪に映ろひ、水も天も醉へるが如くなりし。

（未完）

漫録

頼山陽翁未亡人尺牘

此の尺牘は、頼山陽翁の夫人が、翁の身まかられし後に、翁の知友なる櫻田檵太夫といへる人に贈りしものなり。今此を見るに翁が病に罹りたる時より、臨終の際、又、後のまはざ〳〵にいたる迄、目のあたり其の有樣を睹るが如く、又其の能く夫につかへたる事は更なり、姑に對する情誼二子を育つる苦心、且は夫の遺されたる著述書の事など、何くれとなく心のいたらぬ所なく其の婉順貞淑の趣宛ら紙上に溢れ、又詞づかひも取りかざりなく、全く肺腑の間より露れ、讀むものとして坐に感涙を催さしむ、顧ふに翁が一世の偉人なりしことは、今更あらためていふ迄もなく、其のよく大名を成したるは、夫人内助の力も多きことなるは、此によりても推しはからるへし。夫人姓は小石氏翁の知友小石玄瑞の女なり。又櫻田は仙臺藩士にして、京都詰重役を勤めたる人なりといふ。此の書、意義の明ならぬ、又假名づかひのあやまれるふし〳〵も、多くあれど、そは强ちに改めず本の儘になし置きぬ。

十月廿五日出は状一昨廿六日牧善助より届け參り候早速はいし上ゟ〳〵まづ〳〵其は地は揃ましは機嫌よくおはしまし候だんは目出度存上ゟ〳〵扨此元主人事こまぐ〳〵と相たづね下されは思召のほど忝存ゟ〳〵主人事も六月十二日より吐血誠にいさゝかなる事にていつこう氣分もかはり不申候へ共何分新宮小石と肺血にて必死の症と被申驚入申候五六日程いたし候て氣分少しもかはり不申十二日より食事は白かゆのみ御酒は少しもたべ不申發生嚴敷致し其内著述のものども人々に手はけいたし候てうつさせいろ〳〵と左様の世話致候通儀は最早出來わり（本ノマヽ）昨年頃より心づもりの政記と申す著述を致候積りにて其を塾中にいられ候人にきうにうつさせやはり日々机にかゝりすこしづゝ本を見たりすこしづゝ文事かんがえしよくじもおいしくいつこうよろしきあんばいにて十二日ごろより廿日頃迄は血いで其後はおさまりまづ〳〵それきりとよろこび候處七月廿五日又々はじめより大に出誠に〳〵おどろきどういたしたものかと存候へ共大病に候へ共何かに心もつき私にはたしかに存ぜられ又五六日にてちおさまり候處七月廿八日頃より當地暑さたへがたくとなりざしきをかりうらよりゆきゝ致しひめし（本ノマヽ）河合よりかいほうに一人上京卅日ほど逗留いたしもらい右座しきにて又八月十八日大出廿二三日又出（血ノコ）是にて誠につかれ出身もよわり候へ共やはり氣分は少しもかわり不申其よりせきがつき夜分もろくにふしがたく候へ共さして難儀はな

く候日々しよくこのみ被申候へ共至つて味よろしく小石又ふく井新宮……（此處不通）九月よりすずしく內へ被歸（此迄隣家の坐敷をかりたり）やはり時々机にかゝり時々せなかさすり塾中三八はん手がわり一人づゝ夫に私かはほう（本ノマヽ）しよくじくすり一度も人手にかけ不申九月十日より御丸にかゝり十六日これよりさつぱりとてにつき兩べんとも其まゝにて致申候誠に〳〵氣分かわりなくしよくもつの話しを人がせぬと（本ノマヽ）申いられ候廿三日朝より私むねにこたへてあとの事被申とん〳〵此まゝ此家にてすみ此家此方に求め地代拂候やう子ども又二郎十歲三木三郎八歲むすめ私どもに是迄の通り何もかわりなく子どもそだて子とも內に置候へとやくにたゝずとなり候

ゆへはん料出し候而も外へ遣し候やう京にて「二家賴」をたてゝをたのしみにいたすべく候とゆいごん有り此方も口おしく候へ共とても〳〵本復は出來がたくと申され誠につらひことにて母に先だち候事不幸（孝カ）と度々申され候去かし是も呼で（ぴカ）よせなぐさみさすまし（本ノマヽ）かれをおもひ候へはまだしもと被申候どうぞ〳〵と存し候てくすりをすゝめいろ〳〵といたし候へ共一つもきゝ不申誠にのこりおしく存候廿三日にもくれ六ツまへまでもはなしいたされさしてくつうもなく誠に〳〵らくなるりん終にて私にも一向事絕へ候事と存不申むねおさへて候へハ其まゝにて眠れ（本ノマヽ）一寸前まで物申居られ候此度誠に〳〵大病とは存候へ共どうぞ致候內にはよろしくと存

候處右の次第にて唯々ゆめのやうにのみおもはれ今にがてん參り不申扨〱おしき事を致し今十年せめていてくれられ候へバ身供も又子供もめ口つき(此處不明)なか〱今やと立なれ候事とはつゆもおもはず何につけていた〱しく存じゟなげき候てもいたし方なくいまゞしきにしん主まつり置百ヶ日迄日々そなへものせめてと存候夕方いた酒そなへ申候てうぶつのさかなくはし(菓カ)ともそなへ候到らいものはいは(本ノマヽ)そなへ申候まづ〱今迄の如くに存じ何も其心にてつとめ國元へゆかれるす中と存じ居候(痛絶ノ語讀ムニ堪へズ)いろ〱の事など候へバむねふさがり口おしくいま〱しくなりはらのたち候てどうもいうにいはれずのこりおしくなり候今迄の如くにそなへものも病中にそなへさせ候心にていたし居候まづ〱何とも主人より可なりにいたし置くられ(本ノマヽ)又二郎學問致候て取つゞき候迄は此所にて私むすめ下女も主人病中三人居候へ共うち事此程よめ入致し十三年つとめ候下女としま一人に一少女一人(本ノマヽ)是は來春迄としまはいつ迄も主人にも尋わり(本ノマヽ)かいてろしにいたし候ものにて是迄の通りにやはり東三本木丸屋町頼又二郎と遊バして相かはらず御狀下され度誠に誠に私事さぶしくくらしゟおなじみのよしみに相かはらず御狀又二郎へ御つかはし下され度願上候牧喜(前ニ善トアリ誤カ)助方へ遣し申候三木三郎外は兒玉三郎と申方へ病中遣し置候へ共さぶしくとりかへし候今はど塾中一人右主人ちよ述う

つし丶せき五郎と申す人めいはくがりちつども外に出し候てうつし候事出來ぬものにてむりにたのみ右のせいき(政紀か)うつし居いつれはやく板にいたし度主人も子どもの家徳と申いられ候（後果シテ此言ノ如シ）江戸つめ頼餘一子ども實の兄にて(山陽翁先妻ノ子ヵ)來春こうたいにてまち入存候しんせつに書狀まいりうれしく存〳〵何かと取込まんばいの中に又三才のむすめ霜月朔日よりほうそう誠にむつかしくすでにこうと大心ばい致し候へ共よう〳〵と去のぎ私少もはなれがたく去ながらおこんもじの御人樣故わとの所も御あんじ下され候と存じ御返事申上候かしく

後霜月廿八日　頼又二郎母より

さくらだ様

御おもし様人々

なほ〳〵先便につうぎ(通議)下し申候主人毎々さくらだつうぎうつし候て遣し候事申いられ候はゞ事はたづね下され殊に〳〵おもいわけよろしく私へもたしかな文度々まいり安心いたし候私にめでらしき事なくよの中有がちの事故思のやうになり子供そだて候やう申こされ候

なほ〳〵おひ〳〵に寒さつよくおわしまし候聞ずいぶん〳〵おいとひ御用心遊さし誠に日々さぶしく暮し〳〵どうぞ〳〵子ども二人とも可なりの人になり候やうと是のみせめてのたのしみ子どもがんせなく喪中にてもおとゝひせりあひ夫は〳〵あうせ(本ノマヽ)なる物にて喪中日々二人づれにてはかまゐりいたし候西寺に候へ共つね〳〵山を

このみ候故此度東山ちようたく寺山へ地もとめはうむりいたし候いまだわたくしは參り不申候へども山地いこふよろしき所と日々子供かへりてはなし申候山の上にて此元三本木もみな〳〵見をろしと申事、誠にわん外なる事にて扨たんそくいたし候國元母より申參りつね〳〵病氣なくて病身ゆへ國元おぢさも申なされ才氣のあるものはとても長いきは出來ず五十三までが、せいさいと申こされ候殘り候物は誠に殘おしき事いたしかたなく候おぢより國元へみな〳〵子供つれて下り候やうと申參り母も同やう申こし候へども主人京にてくらし候やう申置候子どもがく問いたし候てそぞくの先生ともいたし候まではろ〳〵に主人たくわへにて取りつゞき類二けんたて候つもりにてとかうなき

事ながら私氣はりいれ申し候くれ〳〵も子供御ひきたて下され候やうたのみ上候兎角こんもじになり候御人だん〳〵とわり候てもじついなくけいはくおほき物にて主人一せんのでし大坂にてみせ出し後藤俊藏と申人御座候此人病中にも度々見た詩文は主人ゆるし候ほど出來、誠に才氣な人にて人がらもよろしく此家大事にいたしくれ候なほ〳〵主人印を其内にはみな〳〵いんふうをして一本づゝゆいもつにいたし候間又わとのたよりにわけ申候此度書狀はやばり牧よりとゞけ參り又返事牧へ遣し申候先日のつうぎ御ゆいもつに上候それはおやしきたよりにいたし候とくに相とゞき候事と存し候どふぞ〳〵主人大ゐにあんしはねおられ候事ゆへちよ述のもの御らん下され候て主人に御わひ

とおぼしめして可被下候、誠になくなられ候兩三日ちせへもしはしにて(本ノマヽ)ふしられ候へども文を人にきろくを(本ノマヽ)いたし候と申おられ候、誠にくくいたくくしく候これよく出左樣の事のみにてさてくく存出し候へども日々さふしくおけくれおもひ出し候へども今からの所までのとりおしく候御さつし可被下候(誠になくなられ以下不明)

(終)

若狹國の老女

建部綾足

(文字の傍に――なつけたる處文意解し難けれど原文の儘にす)

若狹國三方郡早瀬といふ所に、いと貧くて住む女の、名は京といふが、舅の翁につかへ侍りしことのまめだちたるぞ、ためしなきみさをに侍るなる。此をみな、十まり四のとしより、他の家に入て、いとむつかしきふたりの舅を、其愛子なすいたはりかしづきて、童なず馴むつびけるほどに、おのづから憐ものにおもひ成にけり。さて姑は死て翁ひとりになりて後は、いかによすがなくおはすらんとおもひて、ことさらに心を加へてつかへけるに、翁は七十年をかりにて、世にいふ老病などいふけにや、心も愚になりて、いはけなき子の如く泣いらち、朝夕のたうべものなどは、時ならぬものを好み出して、せむすべなき事あまた度なれど、すこしも其翁の言にたがはず。とり作てまゐらせけり。冬の程なるに、風吹あれ雨うち志ぐれて、海

のうへもいとあらく、漁夫どもゝ業をおこたりて、いとかなしくおもひ居りける頃、此翁、眞魚のいとよきをたうべむといひ出しけるに、七日斗も日しけて侍るに、眞魚とては、是らの海邊には、いづくにいきて得むかたもあらず。さはとて、なしとも、あらずともいはむすべなければ、天地の神まこひのみ、いかにもして眞魚を得てしがなといのりけるに、去るしもあらず。さまれ、海畔を立ありきてみむと、波にうちよせられて侍ることも、なからましやとおもひつきぬれば、いとさむき朝風にふかれて、かゆきてゆき見けれど、さるものも得はべらず。こは我心のきたなく侍るによりて、神のまことをきこしめさぬなり。今はせんすべなければ、いかにも翁をいひなぐさめて

空のけしき、海の心のなほりたまはんまでは、ともかうも、物つくりてまゐらせむとおもひしかば、泣々家にかへれど、翁はのゝしりさけびて、眞魚くはむ〳〵とぞ泣居ける。此をみな、かきさすりて、唯今漁夫どもが舟どもおほくまたてゝ、釣に出で侍れば、此ゆふなぎにのりては、さはに得てかへりなむ。時もうつりぬるに、朝食は心よく參りてまたせたまへ、よき物つくりおきてさむらふとて、ほし魚など、よきさまに作りてすゝめけれど、さらば夕食には、たがはで眞魚たうべさせよとて、朝食はくひ居たり。いたうれしくおもひて、衣のいたくひりかけなどしてぬれひぢて侍るを、今が間に洗ひてあぶりほしてきせまゐらせむ。是めせとて、ときほどきて侍るものを、きか

へさせ、かのくさき衣をもちいでゝ、石井のはべるにいきて、そゝぎあらはんとおもひて、いたうて侍るに、鳶のかけり來て、何にかあらむ。めのまへにとりおとしたるに、魚のいまだいきてあるが、をどりめぐるなり。いとうれしくて、とらへて見れど、二尺ばかりなる、ぶりといふ魚なりけり。唯夢のさまにおもひなりて、先之をもちきて、羹もし、燒もしてまゐらせけれど、翁はかぎりなくよろこばひてけり。そも〱、此をみなの翁につかへて侍りける、まめ心の深きに、神々のめでさせたまふと、おもふさまのことの、くさ〱くしき事はべる中にも、此事ももつはらに人いひながしけるほどに終には國の守きこしめして、いとあつくかづけものたまひて、いたはり給ふ。猶翁が天路しらして後も、追て、つかふまつるこゝろは、生時にまさりてねもごろに聞えけり。此女は、今四十年ばかりになりて、其所に住て侍りとなむ。

（折々草）

千早ふる神のみるめもはづかしや
みな思ふさて身をやすつべき

和泉式部

花ふゞき

其六

墟井雨江

渺々たる水波、無情の色深く、片々たる離雁、斷腸の聲幽に、無限の煙霧、滿目の風露、鴫立つ澤にあらねども、心なき袖やしめるらむ。潯陽江頭にあらねども、ながむる人を愁殺せむ。秋ものすごき尼ヶ崎の浦わに、かよわき御息所が、杖とも柱とも頼みたまひたる賤機の行方を知らず、武文をさへ、失ひしと知り給ひし時の心やいかなりけむ。

長者の屋形に、思ひがけなき虎口の難義なりしも、けなげなる賤機父子の忠勇なりしからよ、纔かに危急を逃れさせ給ひしも、賤機のあらぬ悲しきを如何にし給はむ。さばかりに姫を慕ひ奉り、切に仕へ奉る賤機のやさしさに、姫もうれしく頼母しく、唯わが身のごとく、わが影のごとく、離れがてに思ひ給ひたる事なれど、かれあらでは、御身さへだに、あらぬばかりのおん心地せらるれば、強て武文をかへしやりて、陸路をあさらせ、賤機の來るよしなくて、如何なる淵に沈むとも、此の岸を去

らじと云ひて、待たせ給ふを、舟人は、もと奪り奉らむ企の一味なれど、さてはかくまでに力を盡くしたる人の心を知ろしめさぬに似たらむ。此處に、かく在らせては、追ひすがらむ賊も危し。とく沖なる大舟まで達け奉らむ。御身を送りまゐらせて、余、又此處にかへりて、彼の伴人を待ち取り候はむとのみいひて、御息所の、なは賤機なくては、彼來らではと、いなみ給ふを、知らぬさまして、強て繩をとき、沖なる舟へと、漕ぎ寄せぬ。

心元なくおぼせど、爭はむすべなくて、ながめ玉ふに、ありつる舟人は、いかにまつらむ、直に陸にかへすべきけしきなし。あはれ、とくもとの岸へ戻りてよ、彼の者の、かへり來て、尋ねむにといへど、憎くや、きかぬさましたり。はては、ありつる小舟を、とものかたに引きあげ、帆をもとゝのへて、大船は、はや風にまかさむけしき。

あな、なにする。かなたに人は見ゆ。如何ばかりにても、はしきものは取らせむにかの人わたしてよと、涙と共に、かき亂れ給ひて、頼み給へど、上臈だに奪れば、物は欲しからじ。かの者渡して何かせんと、うち笑ひ、舟べりたゝきて、のゝしる鬼

心の人面こそ、憎むべきものなれ。
さては、賊の舟にや欺むかれたる、なさけなや。鹽燒く海士ならで、からき風に吹れ、沖わたる舟人ならで、うき波に濡れそぼつ、かばかりに果敢なく、あるかひなくおぼゆるうき身のはてを、なほ何處の淵に沈めむと思ふらむ、無慘の人々かなと、思ひ給へば、如何なることにか成らむと、恐しさに、ものも覺えさせ給はず、ふしまろみて、唯、なげきにくれ給ふぞ、あはれなる。
磯の方には、其舟かへせと、武文が、狂氣の如く、のゝしる聲、頻にきこえ、はては、怨魂風に乘りても、かへさでやはと、一世の忠臣が、鐵胸を摧く忿怒の一聲、さしもの大舟も、震動するかと覺ゆ。あな、腹かき斬りたるぞと、舟人のどよめく聲に、さては、武文をも殺したるか。いとほしや。さまでになりてだに、わが身を惜むか。ふびんのものや。いで、汝等父女に、わかれては、何處の世、何處にか、心易かるべき。如何ならむ世までも、導きくれよ。黃泉の奥がへも、伴れ立ちくれよ。あも遲れねばと、心の中にの給ひつゝ、舟緣より、あはや沈まむとし給へを、何時の間に、此の所には來りけむ、筑紫の五郎、あはたゞしく、おん袖をひかへ、こゝ

なるは、腹かききるほどの、むごたらしき男には侍らぬを、まろが心も知らせられで、昨夜かけて、痛く、もののみ思はせ給ふ、つれなやと、きこゆるも、憎くむべき奴かな。

御息所は、あなあさましと、おん袖をうち拂ひ、いで、まれものや、人のきはをもおぼえざる無情のものや。わが身に、何の恨ありてや、かくは、わが身を、苦しむることをする。かなしき忠臣を殺すわざする。やさしき少女を失くす無情の振舞ひやする。わが玉の緒の、糸一筋だに、絶えざらむほどは、汝等ばかりの身の、ひかむとて、よるべきわが身かは、近寄らむ、女子とて、一念は、汝等に劣るべき、許さじものを、玉の御手をかためての一言。なよ竹の、世にたわやかに見えながらも、さすがに、あだなる風雪に屈せぬ節のこもらせ給ふ。げに、竹の御園生のおんゆかり見えてゆかし。

五郎も、さすがに、みけしきにかしこみて、え近よらず。されど、沈み給はむを、許すべきやうすなければ、よしなき妨せられ、見苦しき終せむ、いかに口惜からましとおぼれて、容易く死ぬさへ叶はねど、おんぞをかつぎて、身をあがきて、動じな

き給ふ。

船は、いつしか鳴門近くなりぬるに、一朶の黒雲、武庫の山邊に靉靆くと見えしが、あなやといふ隙もあらず、天は萬朶の雲かきみだれて、風吼り立ち、わだつみも鳴りとゞろきて、勢を合はせ、天地共に狂ひ、鬼神共に荒れ出でゝ、舟を互に呑むと爭ふに似たり。あなや、舟は万丈の山にうちあげられて、微塵となりて散らむずると思へば、忽に千仭の谷にうち沈められ、藻屑となりて砕け去らむずると見ゆるに、乗れる人は、いふも更なり。水士どもさへ、燋きさやぎ、いふせかりあらず。此は、必ずや、龍神の、舟なる寶に、おん心懸け給ふならむといひて、積める荷物ども、投げ入れ／＼、必死になりて、働けど、風ます／＼狂ひ、浪いよ／＼荒れゝば、人々は、皆青ざめて、生きたる色もなし。

さては、龍神の心、寶にもあらぬは、上臈の色ある衣を、求め給ふならむとて、一人の水士は、御息所のかつぎ給ふ御上衣をひきはぎて、投げこみたる無慘。天地も恚るか、浪風更にすごく、舟を卷くよと見るや、件の水士は、行方知れず。舟は虚空に舞ひのぼり、地下に踊り入り、帆ははや破れ、柱も折れ、梶さへ砕けぬ。心弱

きは、唯震慄ひて、ものもえいはず。強きも、唯わなや〳〵と、のゝしりさやぐのみ。人々、いかにせむと思へど、誰とて、せんすべもあらず。唯沈まむか、碎けむか、船と共に藻屑とならむのみと、皆取りつきて、死を待つばかりなりけるを、水手の中に、年老いたるが、一人ありけるが、這ひ出でゝ、此の鳴門と申すは、龍宮の東門に當る所に候ふて、海神の寶を望み給ふて、折ふし、かゝる事の候へど、かばかり烈しき事は候はず。こは、一方ならぬ海神の心と覺え候は、かの上臈のあでやかなるを惜しみ給ふならむ。上臈の御身とて、舟なる大方の命にはかへ難し。こを、試に沈め給ひてよといふに、五郎は、もとより、かしこくも、御息所を執り奉らむといふ淺ましき心なり。何とて、情ある者ならむ。とてもかくても、つれなきみ心の御身ゆゑに、かくて、われらが命、捨てむこそ、あたらなれ。いで、波まにまかせ奉らむ、心のまゝに、畑とやら、野とやらへ、たどりつき給ひて、宮とやら、小屋とやらに、住み給へといひて、立ちよらむとする人非人、世に鬼といふ者ありとせば、この五郎をやいふならむ。

御息所は、兼てより、われより捨てむと思ひたる身の、何にかは爭はむ。わな、汝

の手や下さるべき。妨やせむとて、とくに消ゆべきを、惜しからずも、殘りたる身。水泡となるは、わが身の願ふ所なるにといひて、はや入らむとし給ふ折しも、法師の一人ありけるが、おん袖にすがりて、離さず。海神とて、神ぞ。徒に人の嘆を悦ぶものにあらず。こは、必、此の船なる人に祟りたる死靈のわざならむ。佛のみ光を祈らせ、退くべし。愚僧が主とならむ。人々諸共に、佛を念じたまへといへバ、慈悲など仰ぎし事なき水士さへまでが、必死になりて、念じたるに、怪しき哉、そそり狂ふ黒雲の中に、武文が血刀をうちふりて、船かへせ、かへさずやといふ姿、見えて消えうせぬ。

風も、やゝなぎて、波も次第に靜まらむとすれども、いかにしけむ、船はおなじ波にうつまかれて出る能はず。水士は、やゝ力を得、いまは何をかためらふ事やある。此の上臈ゆゑに、船難義すると覺えたり。あはれ如何にもして、本船より離さむ。さらでは、所詮せんなしと、のゝしりて、遂に御息所を、小船に移し、強げなる水士一人を擇て、添へまゐらせ、なほ山と立ち、谷と沈む浪まへと、うちまかしける、おん身のはてや如何ならむ。

末の露

小栗風葉

（一）桐の一葉

千住の煙少時も立去らで、谷中の露消ゆる間無く、墓地の價は下町の角屋敷に勝りて、さる非人わがりの隱坊今は小金を貸しけるとぞ。げにや流行感冒は久松不在の門に訪れずと雖、無常の風は上梵の臺を遁さずして、我や人や、今日とも識らず明日とも識らず、後れ先立つ者は元の雫末の露よりも茂し、と白骨の文章にも見えけり。

今日本にて菅原伯といへば、遠く歐州の果まで、誰知らぬ者も無き老政治家の、一言一行は常に天下の耳目を動かして、令孃と共に邸間近の緣日の逍遙さへ、翌日の一頁面に儼々しく吹聽せらるゝ程なりしが、今年の春の末季、腦病の氣味にて、花は散る入相の鐘の音羽の別邸に引籠まれ給ひしよし、諸新聞にも傳へられしまゝ、其後は何の音沙汰も無く、唯述懷めきたる詩歌の餘可からぬが、時々機關新聞の片隅に顯はるゝのみなりしが、それさへも爰二月許は跡絶えて、路邊の捨子も、泣か

ねば知らぬ風して通る人心淺猿しく、さしもに高かりし菅原伯の名も、早や大方は世に忘れられたる今日此頃、卒に病危篤の由を傳へて、朝野一同寢耳に水の驚駭一方ならず、我先にと馬車を驅り車を飛して、音羽の町に見舞ふ者退きも切らず。

生者必滅、常磐の松も一度は枯れで果つべき。老て益壯なりと人も言ひ、我も許せし菅原伯も、病といふ強敵には勝てず。半年餘の長病に頰は瘦け、頤尖りて、色は土の如く、手足苧殼の樣に瘦細りて、吐く呼吸さへも苦げに、落窪みたる眼はいとど濕みて光無く、過ぎし昔、貴族院の演壇を叩きて、辨論風生、一喝の下に滿場の議員を叱咤し給ひし元氣も何方へやら、氣力全く失せて、最早此世の賴も少く見え給ひけるに、見舞ひし人々も思はず淚を呑みて、あはれ盡きなむとする此偉人の命數を惜みぬ。

十時を告ぐる護國寺の鐘と共、門内に乘棄られし馬車人力車も大方還りて、さしも喧かりし馬の嘶聲、車夫馬丁の談聲も全く聞えずなれど、一時は足の踏場も無かりし玄關の履物、一足も無くなりて、獨淋げに式臺照らす電氣燈の光白し。取次の書生は晝の疲勞に居眠の夢濃く、毎時夕方には閉す表門の、今宵は客來の爲に後れて、

今やう〳〵門番の門さす音邸内に響き渡る時、奥の病室に詰懸けたる人々も一人起ち二人起ち、軈ては夫人波子、令孃綾子、腰元お淸と、女ばかり殘りし間に、男は唯一人。八瀨柴太郞とて未、年若き法學士にて、常には隨分能く語り能く笑ふ方なれど、有繫に九死一生の病人の枕頭に座りては、日頃の冗談も口には出でぬと見ゑ、始終默然として首俛れ居れど、さらでも濕勝なる女連の、何れも心細げに沈み返りて、眼には露持つ雨催、一座寂として辭も無し。唯交代に伯爵の寢顏を眺めては、氣遣はしげに嘆息洩らすのみ。

夜は沈々と更け渡りて、庭に凩、遠く半鐘の音の聞ゆる時、次の間の柱時計は一時を打ちぬ。今まで昏々と睡り居られし伯爵は、ふつと眼を瞬き、おろ〳〵と枕頭をば眺め給ふに、夫人は膝をも進めて、如何かあそばしてと訊ね給へど、別に辭も無くて唯口をば開かるゝに、お藥でござりまするかと、重ねて問へど、さにもあらぬか少に首をも振り給ふ。もしやお冷水ではござりませぬか、と傍より口をも狹み給ひし綾子の辭に、やう〳〵伯爵の頷き給へど、お淸は早速水瓶の水をも硝子盃に移して出せど、生憎看護婦の座に居らねど、夫人は手づから薦め給ひながら、耳の傍

にてお氣分はと問へど、唯眉を皺められて、何の應答も無く、其儘再び目を塞ぎ給ひぬ。

夜晝詰切りの醫師三人、最前より奧の一間に夜食の膳出で丶、睡氣覺しとて麥酒など侑められ、少時は病人の看護を素人にのみ任せありしが、有繋に容躰の苦になりてや、一人の醫者は間も無く病室に來りて、いや何うも失禮いたしました、と言ひつ丶病人の傍近く座を取りて、何か變つた御様子も、お見受けなされませんでしたかと問へど、別に其様なお氣も無かりしやうでござりますれど、只今お冷水をお喫りになりましたと、答ふる夫人の辭に、態と仔細らしく小首を傾けて、相變らず熱度がお烈いと見えまするな。何は兎もあれ、斯うして沈着いてお寢なされまするのが、何よりでござりまする、と又も小首を捻りぬ。綾子は氣遣はしげに醫者の顏をば眺めて、如何でござりましやう。未だ此月中は大丈夫で入有いませうか、と涙含みて訊ね給へど、否如何いたしまして、爰一周間は到底もお難いかとぞんじまする。長うて三日、御容躰の變り様によつては、明日一日も如何かと思はれまする。拙が斯様に申しましては、皆様のお氣を落させ申す様なもので ござりますれど、一時の

お氣休を申上ぐるよりはど、氣の毒そうに答ふれど、最うあの明日が日も。そりやまあ眞箇でござりまするか、　今更の樣に驚き呆るゝ綾子の樣子を、夫人は冷に見遣り給ひて、御壽命ならど所爲もございませぬ。

夢にや駭れ給ひけむ、伯爵は又も眼を開き給ひて、頻に四邊を見廻し給ふに、一座不審の眉をど顰めて、言合せし如く一同其方に膝をバ向くれバ、中にも醫者は少の油斷無く、只管病人の顏色をバ看護り居けるが、軈て耳元近く口をバ寄せて、お苦しうござりまするかと問へど、やう／＼口をど開き給ひて、少し言遺きたい事がある。波と綾と八瀬だけ殘りて、餘人はと辛くも仰ちるゝ辭に、名指されし三人は思はず顏見合せて、互に合點のゆかぬ面色。それでは少時く御遠慮いたしまする程に、萬一御用がござりすれバ、何卒お召しなされて、と氣を利かしてお淸の立去る跡に、醫者も如才無く興奮劑を施して、可成お長くならぬ樣に、皆樣がお氣をお注けなされて下され、餘お苦さうな御樣子でもござりましたらど、もう一度興奮劑を差上げまする程に、一寸お報らせ下さる樣に、と言殘して座を避けぬ。

興奮劑の効驗は覿面にて、惱も少く忘れたるに、伯爵は我と元氣を引立て給ひて皆

がも少し傍へ、と仰せらるゝまゝに膝をすゝめて、三人は枕邊近く畏りぬ。改めて申し遣すといふのは、他の事でも無いが、と先夫人の顏をも凝視め給ひて、能くお前にも頼むで置くが、私が後は八瀨に繼がして、何卒綾をも娶してやつてくれ。是だけは必、間違へぬ樣にと、仰せらるゝを夫人は打消して、其樣なお心細い事を今仰有らずとも、それよりは少でも元氣をお附けあそばして、一日も速く御全快なされて下さりませ、と聲濕ませて搔口說き給、に、有繫氣剛の伯爵も恩愛の情に胸塞がりて、少時は默然と目も閉ぢて居給ひしが、否々、到底も全快は覺束無いものと、疾より私も覺悟して居れば、お前們も其樣な空頼を棄てゝ、何卒死後の心配を爲てくれ、と言ひさしてはつと一息吐き給ひ、八瀨、お前の氣には入らぬか識らぬが、頼少い綾を可憫と思うて、行末永く面倒を見てやつてくれる氣は無いかと宣ふに、八瀨は最前より首俛れて、何やら獨思案に沈み居りしが、此時やう〱頭を擡げて、身に餘る冥加のお辭、寔に難有うはござりますれど、只今お上樣も仰有る如、殊更其樣な事を今日仰せ出されずとも、唯々御全快の程をと言ふに、早、日頃の癇癖を發し給ひて、餘の言を申すに及ばぬ。唯承知か、不承知か、と焦氣味の辭急しく、呼

吸激ませながら、惴りて應答を促し給へど、八瀨は只管恐縮りて、何の勿體もない。決して不承知と申すのではござりませぬ、と仍も何やら言はむとするを、伯爵は態と聞かぬ風して、又も苦げに吐息を洩し給ひながら、綾の事さへ左樣極まれば、最早此世に思遺す事も無い、とさも安堵し給ひたるもの丶如し。

興奮劑は油盡きたる燈火の心を搔立つる如し。一時は光を增して四邊を照せど、油の無き火の何時までも保たむ樣なく、却て滅期を早むるのみ。伯爵の最前よりの附元氣も、次第に萎れて、藥の精氣盡くると共、我知らず眼をも塞ぎ給ひぬ。綾子は只管死を俟つが如き伯爵の辭に、悲さ最身を斫る許にて、胸は逼り氣は落ち、睫毛に冷ならぬ露の玉。眼は次第に濕みて、燈火の光も朧に霞みて見ゆるまで、八瀨の手前泣面見せじと、仍俯きも爲で居給ひしが、生憎急き上る淚は雨の如く、はら〳〵と頰を傳うて膝に落つるに、最早恥かしさも打忘れて、堪えず其所に泣伏し給ひしまゝ、我身に懸る最前よりの伯爵の辭も耳に入りしやら。あはれ正體も無く見え給ひぬ。一度口を噤み給ひし伯爵は、未だ言ひ殘せし事のありてや、又も眼を睜き給ひて、前よりは一入切なげに、綾と一言呼び給ひし聲に、やう〳〵淚を振拂ひて、密

と面を擡げ給ひし綾子、可愛や睚邊も眞赤に擦り腫して、眼には滴の溢れ懸りつ咲き初めたる紅蓮の花の、曉の露にそば濡れたるが如し。今も八瀬に言ふた通なれど、お前も其樣に心得てゐよ。如何じや、不承知ではあるまいな、と仰せらるゝ聲は最と微なれど、綾子の耳には雷の如くに響き渡り、赫と一時に逆血せ上りて、羞かしさに返辭も得爲で居給ひしが、重ねて如何じやと問はるゝに、やう〳〵口の内にて、少も不承知ではと、半言ひさして一入顔を赧つめ、有繋は乙女の包みきれぬ嬉さに、涙の痕の未だ干ぬ面に雨後の新月、思はず微笑をバ洩し給ふを、夫人はじろりと横目に見遣りて、頰の邊に冷なる笑を浮べながら、又八瀬の顔をも眺め給ひぬ。

其夜の明方近く、ほの〴〵と東白みて、明星の光淡く、朝風そよと桐の梢に訪れて、殘の一葉の脆くも散る時、八瀬、くれ〴〵も綾の事をも頼むぞよ、と微に口の内にて繰返し給ひながら、伯爵は眠るが如く息をバ引取り給ひぬ。幻の世や。

文林

初雪　東久世通禧

うなゐ子がよろこぶ聲に夢さめて
今朝ふりそめし雪をみるかな

鍋島直大

都にはまだふらねどもうちわたす
やまには見ゆる今朝のはつ雪

高崎正風

はつかにもちりのこりたる紅葉の
木ずゑにかゝる峯のはつゆき

津輕承昭

山からすおきたつ聲におどろけば
はつ雪ふれりをかのまつむら

竹屋光昭

よひのまは風のたゝきし窓の外に
今朝めづらしくつもるしら雪

池田政禮

都べもいとゞさむしとおもふまに
つくば根しろく見ゆるはつ雪

水野忠敬

朝戸あけて見いだす庭のま白にも
ふりししら雪めづらしきかな

前田利昭

跡つけてこん人もがなめづらしく
けさふりそめしにはのはつ雪

またれこし日數ほどには積らねど
けさめづらしき庭のはつゆき
長谷 信成

冬の夜のかぜふきやみて閨の戸の
ひましろたへに雪ふりにけり
前田 利聲

めづらしと見るほどもなく初み雪
たどるばかりになりにける哉
黒川 眞頼

ちりしきし紅葉の色もかつ見えて
うすきがうれし庭のはつゆき
宮地 嚴夫

信濃路はもみぢの色のみえながら
北郷 久政

うまやののきにはつ雪ぞふる
坂 正臣

おもしろく初雪ふれりことさらに
つくろはざりし茅がのきばに
風早 實義

とは山のしぐれの雲のあとみれば
またれし雪とはやなりにけり
植松 有經

はつ雪のふれるあしたも家にのみ
こもれる老となりにけるかな
谷 勤

またれてもふる初雪をいろあせぬ
庭のおち葉のうへに見るかな
大口 鯛二

とふ人はありもあらずも釜かけて
木の芽いざにんけさのはつ雪　松本　高明

このごろの深くおきつる霜よりも
あさくぞ見ゆる今朝のはつ雪　千葉　胤明

遠やまにはじめてつもるしら雪と
のこる紅葉のひまにみるかな　岩崎　勝従

くるゝまで目につかざりし初雪の
積りにけらしさやに見えつゝ　平塚　雎鳩

閑庭霜

ひとも來ず嵐もとはぬかくれ家の
にはおもしろく霜ぞおきぬる

殘菊帶霜　三輪　義方

しら菊のはなにしられぬあさ霜を
まがきの竹のうへに見るかな

晩鴉　三浦　千春

川島のながれ洲さきにふたつみつ
みつあみてをる夕がらすかな

山雪　西川須賀雄

ふる雪にいたゞき白くなりにけり
くろかみ山もとしやつみけむ

東山の百合子　佐々　豊水

かぢの葉の蔭にはへる百合の花
香はしき名はかくれざりけり

初雪　保科　節子

都路はまださえぬともおもはぬに

はつ雪ふれりをつくばのやま

三島　竹子

いつのまに雪ふりにけん朝ぼらけ
いづこを見てもま白なりけり

小笠原艶子

さしいづる日影にけとて浅茅生の
つゆとなりけり庭のはつゆき

保科　寧子

ひとみなのまちし初雪かれのこる
菊のうへにもつもりけるかな

高崎　竹子

たのしげにうち見ゆるかな初雪の
つもれる庭にあそぶうなゐ子

鶴　久子

めづらしと見はやす程もなかりけり
けしきばかりの今朝のはつ雪

中島　歌子

松もよし竹もまたよしみるほどの
ものめづらしき今朝の雪かな

諏訪　晴子

朝氷

おきいでゝ手洗ふ水もうすら氷の
むすびそめたるこの朝けかな

師岡須賀子

寒松

色かへぬみさをの松はこと木みな
ちりぬる冬ぞあらはれにける

海上　壽子

冬旅

いづくにか宿はからましひき結ぶ
草のまくらもしもがれにけり

冬衾　　塩井　長子

さむしとはる冬の夜寒にかつぶすま
かさねておもふ親のめぐみを

清少納言　　阿部　優子

玉たれのをすをかゝげてしら雪の
あしたにわけし名こそ高けれ

十一月二十日福家安定ぬしの訃音をきゝて　横井知萬多

人の世は、常なきものとはいへ、斯ばかり、はかなきものとは思はざりき。陸軍副官砲兵少佐福家安定ぬしは、其の身體いと健かに、性いと勤しくまして、公務なる陸軍のことは、いふも更なり、何くれのこと、思ひはかり扶けなして、世のため、人のために、いたく利益となりぬる、中にも、我が水難救濟會のことは、そのかみ、發起人琴陵宥常ぬしと、はかり事として、かたらはぬはなく、わざとしてはからはぬはなく、其の功いみじきことは、みな、人のよくしれることにぞありける。

今年、征清のこと起りしより、終日終夜、ふしどに入ることもなく、つとめはげみませしに、我が天皇の大御心とまして、大本營を、廣島にうつさせたまひしより、其の御供に從ひ奉りて、彼處にものせられけるが、其の出立たす折、おのれが馬の餞しにおくりゆきたるに、何事も頼みまゐらす、身體健かにてなせいはれ、いとをゝしく健かなる身體、一しは若やぎましけれど、そを見る心

地のいとうれしく、おのれと心もいさましくなりぬるに、いかで御國のためにつとめて、とく豚尾奴を討ちはらふやう圖ひてむなど、いひましながら、いと心地よげにうち笑みつゝ、出立たまひき。程へて十月十六日といふに、廣島より名譽の第二軍に從ひて、韓の地に赴かむとすといふたよりありけるが、それより、何の音づれもなく、おのれも、會の事とりもちて、德嶋あたりに出來れど、心にもあらで怠りけるを、思ひきや、けふ、ぬしは病にかゝりて、みまかりぬとしらせにあはむとは。討死は、固より戰爭の常、あやしむにたらず、はた健なるとあらぬとをとふ處にあらず。されど討死ならで、病死ときくは、いかにあはれ。おのれがぬしにあひまつりてより、ことしまで六年の間、風の心地なりときゝしこともなく、金石などにてつくりたらむ身體に、さとりふかき靈魂を、注ぎ入れたらむが如くなれど、千代も、萬代も、かくてのみ榮えまさむと、おもひたのみてあり。こしは、まことにあだなりけり。

さるにても、大御軍に從ひ、風土異なり、言葉も通はぬ外國に渡りゆかして、國のために、知らぬ境に屍を曝しまさむこと、ほまれあることゝはいへ、日頃、健かにませしにつけて、つゆ思ひがけざりき、病のために仆れましぬときかむとは。あはれ、悲しきことの極なりや。今思へど、都を出立たせ給ふ折、身體健にてなどのたまひしは、中中におのれが、ぬしにまゐらする言の葉なりしなりけり。廣嶋を出立せ給ふ折、韓の地に赴むとす

との御たよりは、遙かなるかくり世に赴かむと、去給ふ遺書なりしなりけり。常なくはかなきは、人の世の習なりとはいひながら、斯ばかり、常なくはかなきことやはある。あはれ、悲しきことの極なりや。

さるまても、ぬしがいさみて、出立せつゝ、仰せられし豚尾奴は、今悉くはらひつくし得つや。ぬしが、御心つくしてつとめ給へる、水難救済會のことは、いかに、はじめたてしおきてのまゝに、盛に國内に滿ちわたり、いかに、多くの醫藥も、財產も、力およばぬ人の命、はた船舶などを、安らかに、救ひまもれりや。又ぬしが、はじめ給ひ、はかり給ひし、何くれのことも、皆悉く、終をつけつや。恐らくは、まだ、半のものも多からむ。そをいかにせむとか去給ふ、そを誰につぎ、誰にゆづりてかみまかり給ひし。あはれ、悲しきことの極なりや。

さるのみか、ぬしには、妻の君をはじめて、御子たちあまたおはするを、とり／＼に、其の道をつけたまひ得しか。ぬし身自らも、夢にもおもひかけ給はざりけむ。あはれ、いと悲しきことの極なりや。

かく、いひまつればとて、ふたゝび物ものたまはず、ふたたび音づれも給はず、顯幽はるかに別れ去りて、いかにともすべきやうなし。されど、皇軍の稜威は、いよゝふかく外國にかゞやき、くさぐさのことも、御志をうけつぎつとむる人多からむまゝに、とり／＼に、事なし終ふべからも。あ

はれ、ぬしの靈、天かけりてたすけ導き、みな迷かに、事なく、喪なく、安らかに成らしめ給へよ。唯なしをへたる曉に、ぬしの言容にあはざらむのみぞ、口をしき限なる。あはれ、悲しきかも。あはれ、いたましきかも。

別辭

多賀吳葉子

おのれ、父母に從ひて、この地にうつりすみしは、きのふ、けふとのみ思ひしを、かゞなふれど、はや、五年の昔とはなりぬ。いくほどもなく、父母は、おほやけごとにかゝづらひて、東の都に、ゆきたまひけれど、ひとり止りて、いとゞ心細くおぼえ侍りしに、この學校に入りしより、教のちちゞ、ねもごろに、教へみちびき給ひて、おなじ學のこゝらの友垣も、ふつゝかなる此身を、たよりなきものとかなしがりて、朝な、夕な、席を共にして、學の道にいそしみ、かたみにとひつ、とはれつ、思ふことども、うちあけて、かたりむつみけれど、あらたに、父母をば、また、はらからをも得たる思して、春の花、秋の月、ともに見はやし、共にめでゝ、いとゞたのしく覺え侍りけるに、ゆくりなくも、父母は、東の都にのぼれよとて、むかひの人を、くだしつかはし給ひぬ。あはれ、逢ふは、別のはじめにして、集散離合、さだめなき世の中とはいへど、かくまで、むつみしたしめる御身たちにわかれては、なにかせむ。おのれは、もと、東の都に生れたれど、この地は、父母の故鄕にして、桂濱の月あきらけく、鏡川の水すみわた

れるに、茲にまなび、茲に遊びて、人となりたれバ、おのが故郷の心地して、東の都は、なか〳〵に、他郷のごとくぞおぼゑ侍る。されバ、こたび、父母の膝下にはべりて、うれしとは思はむものから、むかしの友は、ちりはてゝ、行方もわかぬもの多からむ。春くれど、上野の花はさくならむ。秋くれど、隅田川の月はすむならむ。その花、その月も、共にめでゝこそ、樂しかるべきに、ひとりながめては、などかをかしかるべき。たゞ、高坂の古城に、袂をつらねて昔をしのび、鏡川に、舟をうかべて歌どもよみしことのみ思ひ出されて、春花秋月、なか〳〵に、腸をたつなかだちとはなりぬ。父母も、このかなしみをバ、知り給はじ。されど、父母の妾をよび給へるは、深き故あらむに、子として親のおほせをこばむべくもあらねど、思ふこともまゝならぬ浮世とあきらめて、袂を分ちはべるになむ。

御身たちも、あつさ、さむさをいとはせ給ひ、ひときは、學の道にわけいりて、他日、よき母となりて、庭の教に力をつくさせたまへや。おのれも、また、力のあらむかぎり、つとめはげみて、教の恩に酬いまゐらせむと思ふのみぞ、せめての心やりなる。あはれ、いる月、出づる日と云ひけむ。かへる雁、來るつバくらめのをりをりは、玉章たまはりて、ふるさとのせうそこきかせたまひてよ。あなかしこ。

雜報

●孝婦の鑑　あからひく淺草區、美しもの阿部川町百七番地に、小林爲松となんいふ人あり。元は、越前の産なり。過ぎつる年、この家に、養子となり。妻豊子との間に、二人の男子を生けて、蝶よ、花よと寵しみぬ。家は、金革箱の製造を、職として、日毎の稼業に、竈の煙を立て來りしが、身は、近衞豫備役にあなれど、這度の召集に應じて、入營し、虎の伏すてふ海山遠き清國に從軍しぬる事となりたり。越路なる實の母は、此の由を聞きて、武士の、軍に臨めど、固より、生きて還るは、期り難し。久しく逢はぬ懐しの子の、位牌となりたらんに逢はんは、いかに悔しかるべき。今生の中に、一度、うるはしき顔見て、一期の名殘惜しまばやと、遙々尋ね來りて、泣の涙にて訣れたり。後に、豊子は、未、廿歳餘なるうら若き身なれば、暫時は、途方に暮れて、泣き悲しみ居たりしが、夫は、み國の爲に、遠き異國に渡りて、雪に凍え、血に染れ給ふに、そが妻たるもの、、唯、斯くてのみやはあるべきと、雄々しき心振り起して、甲斐〲しくも、夫に代り、四人の職工を指揮して、家の業を勤め、亦、二人の子供が教育を怠らず。かねては、七十許なる祖母と、夫の母なる越より上りたるとに仕ふる優しさは、言語に盡くすべうもあらず。かゝれど、母親、ほと〱

感じ入りて、斯る嫁の側にて、一生を暮らさバ、我が子は無く共、慰まん。されど、女一身にて、内外の事繁きが上に、我の身まで、厄介となりあらんは、あまり、心なき事なりとて、はや、國に歸りなむといふに、豊子は止めて、涙ながらにいへるやう、夫の不在に、母上まで在さずバ、妾か心細さは、奈何バかりぞ。亦、夫も、母上を、故國に置きましては、心勞も、一しほにて、草枕の夢も易からじ。故郷の事も、御心が丶りに侍らむも、妾が心を、憫と思して、枉げて留まらせ給へと、切に乞ひぬ。母親は、其の優しさにはだされ、且は、好まぬ歸國なれど、さらバ、女が心に任せて止まらんと云ふに、豊子は、心から悦びて、愈、忠實に事へ居るとぞ。あはれ、優しき婦かな。

●和歌の徳辨護士を感ぜしむ　京橋區數寄屋町の、お濠に沿うて、常盤の松緑深く、岸の柳、蔭清き邊に、家居をしむる、秋には脆き桐の舎桂子とて、香高き女性あり。去にし頃の事とか。桂子、ひとり、濠に臨める欄干に倚りて、はや、末に近き秋の夜の隈なく照らす月影を眺めてけるが、白雲に、羽根うちかはして、飛び行く雁の數さへ見えて、こよなうをかしければ、歌讀びなむと、懐紙取うで、筆染めて、うち案ずる折しも、おどろかすなるは、十まり五つバかりなる敷子の女の童なりけり。今しも、玉梓の使者參りて、是をと、差出だす文包を取りて打見れバ、阿那うたて、先つ頃、有縁の人の、止むなき事ありて、金借りしを、頼まれて、連署といふ事せしに、早、期約

の月日來りて、明日迄に、返事せずば、執達吏とかいふ鬼のやうなる者向けて、差押といふ事せむと、去る京橋邊の辨護士より云ひ越しゝなりけり。興覺め、胸つぶれ、そかしと聞きし雁の聲も、哀を添ふ種となりて、若、さる事のありなむには、明日よりは、茲に住む事ならで、流浪へて、軒に伏し、草を枕きて、露けき袖をしぼるやうの事になりもやせん。悲しき事よと、暫時は、よゝと許に打泣きしが、流石に、風雅たる女とて、紙とり延べて、

うけたまはりぬ。のたまふやうは、何事も、げに、ことわりとてこそおぼし侍れ。差おさへの事は、御心のまに〳〵にまかせ侍り。今は、とやかうとまうすも、せんすべなければ、唯、何でとも、宿世と、あきらめ侍り。あなかしこ。

と消息文書きつけて、奥に、

寄雁述懐

いつはとは時はわかねど今夜こそ
殊にあはれとかりがねをきけ

歌の徳は、心なき天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも泣かしむと云ふなるに、什麼、辨護士なりとて、心あるもの、、などか、哀と感ぜざらん。其の後は、再、何の便もせざりきといふ。

●池田驛の兒訣　征淸の事起りてより、男子は、軍に從ひ、女子は、看護に從ふ樣の勇しさは、心地よき程なるが、中には、親に分れ、妻子に離れ、妻、亦、夫に離るゝ悲慘の話少きに非ず。是、皆、原を質せば、言さへぐ豚尾漢が、猛き、已知らぬ

心より起りしにて、思へバ、愧き奴なり。過ぎし日、熊本より、四名の看護婦、廣島に行きしよしなるが、其のうちの西島峯子といふが、其の兒に別れし狀を、送る者、涙にくれて、見るに堪へざる程なりきといふ。尙絅女學校卒業生木村愛子が、物しゝ文は、其の折の狀を寫して詳なれバ、玆に揭げぬ。

此度、赤十字社の看護婦となりて、廣島におもむき給ひし四人の君たちの中、西島峰子と云ふ人あり、そも此を如何なる人ぞと尋ぬるに、白川の淸き流にそふ、飽田の郡、春日の里に住給ふ西島某氏の姉君にして、先に一度他に嫁て、一人の男を擧げ給ひしが、其の後故ありて里方に歸り居給ひき。然るに、日淸の爭起りてより、婦女の身なりとて、座して見るべき時ならずと、志を起して看護の業に從事し、務めはげみ給ひしかバ、此度の撰にも漏れず、彼の地に至り給ふことゝなりぬ。兼てより望みし事とて、潔よく去る二十二日の朝、池田の驛より旅立れしが、玆にあはれを催ふせしは、君が其の幼子に別れし時の一條なりき。最早發車の時刻せまりたれバ、弟西島氏、五歲の幼子を肩にして、いで母樣におわかれせよと、今はや汽車に乘らんとせらるゝ方に差寄せられしよ、物のあはれも分かぬる幼心に、母樣と一聲さけび、手を擧て慕ひ給へバ、母君は無量の思を胸にこめ、我子の顏を見つめつゝ、唯一言をもいはずして、汽笛の聲と諸共に、袂を分ち給ひしは、

實にも雄々しき限りにて、送りの人々、誰れ彼も、袖をぬらさぬ物なかりき。

皇御國の御爲に、盡す忠義とは云ひながら、燒野のきゞす夜の鶴、子を思はざる者やある。世の常の婦女なりせバ、不覺のなげきに暮るべきを、いさゝか未練の色もなく、進みてたゆまぬ志、殊勝の事と云つべし。夫れのみならず。君兼て慈愛の心深く、西嶋氏及び其夫人にも、最やさしく志給ふをもて、西島氏夫婦も、亦姉君を敬ひ事ふこと、親に事ふが如く、一家和親の密なるは、往々人をして感に堪へざらしむとぞ。嗚呼國廣く人多しと雖、君が如きは、又いく人かある。眞に得がたき烈婦といふべし。

●防寒衣の寄贈　瓜生繁子、武田享子、永田敬子、梶原俊子、小川二葉子の五婦人は、過般婦人有志會なるものを組織し、廣く全國の婦人に向ひて、出征軍人への義捐金を募集せしに、續々加入者ありて、其の金高二千百餘圓に達せしを以て、右にて眞綿百七十一貫目を買入れ、自、防寒胴着用衣二萬九千三十人分を調製し、内二萬二千百人分を陸軍へ、六千九百三十人分を海軍へ、外に毛靴下五十五ダースを添へ、夫々寄贈の手續を了し、既に戰地に送致せし由聞く處に據れば、畏き邊りにても此事を聞召され、特に山川操子を差遣はされ、胴着調製の御助勢を賜りし由。畏きかぎり、嬉しききはみにこそ。

●師範學校女子部廢止の理由　此の頃、島根縣會にては、尋常師範學校女子部廢止の議決をなし

たる由。其の理由なりといふを聞くに、左の如し。
第一　女教員は、地方の風習に適せず。
第二　女生徒は、學力不充分なるが故に、學期も長く、且、費用多し。
第三　久しく、教員の職に居る能はず。
第四　一校を管理するの能力なし。
第五　女教員の需要少し。
第六　女子簡易科は、不適當なり。
同縣知事が、認可すべしや、否やは知らざれど、兎に角に、教育上講究すべき一問題なるべし。

●雨か涙か　衣手の常陸國、水戸市上市に、河野安太郎といふあり。陶器の燒繼を業として、日毎に、やきつぎややきつぎや、と呼び歩りき、足はぬ勝に、辛き月日を送りけるが、先般召集により、第二軍に從ひ　、目下は旅順口にある由。雪降りしきり、朔風寒き夜の草枕、夢は何處を繞るらん。北京の陷落か。將、故國に殘し、懷しの母、戀しき妻子の俤か。今其の遺族が有樣を聞くに、妻はや、長女(十二)、次女(十)、三女(六)、長男滿壽雄(二)、外に老いたる祖母ありて、都合六人の家内を、はやが身ひとつにて、裁縫洗濯の賃仕事に、僅少の代を得て、かつ〳〵其の日を送る中にも、能く祖母に孝養を盡くし、子女を愛育し居る樣は、哀とも、いぢらしとも、言ふは中中愚なり。はや、亦、夫が身の上を氣遣ひ、自、頭髮を斷ちて三夜堂に祈願をかけ、長女を連れて、雨の夜、風の夜も、曾て怠るなく參詣でゝ、夫が武運長久、身體安全を祈請しをる由なり。はや、

頃日の降り連く雨に、參詣の途次、母子が更なき衣服のひち濡るゝをうれたみ、かこちて讀みし歌なりと言ふを聞くに

月のうちに幾日か時雨ふるならむ
ひとつ衣の干めよしぞなき

嗚呼、皇天は無情なる哉。何ぞ、はや母子が志を憐みて、疾く快晴ならざる。されど、はや母子が袖濡すものは、只に、降り續く時雨ののみならんや。袖は涙にひぢまさりけりの古歌、げに母子が身上なるを知る。

●國學院雜誌　今度、國學院にては、國史國文の普及を計り、且は、深く、この學問を研究めて、其の新彩を發揮さんとて、國學院雜誌といふを發刊せり。今、其の體裁を見るに、論說、講述、評釋、雜錄、應問、彙報、詞林などの欄を設けて、栗田、本居、川田の諸大家を初として、其の他、有名る國學者、筆を執れり。されど、材料の豐富にて、記事の精撰なるは、固より、言を待たざるなり。而して、同雜誌が、主として啓發かんと欲する所は、中小學教師にある由。そは、中小學は、教育の根底なれど、先づ、其が教師を啓發きて、大和魂を鞏固にし、亦、文法を、確實に敎へ、日本國民の全般をして、法ある文章を作らしめむかためなりと云ふ。亦、世の人は、國學院雜誌にて、漢文、英文の評釋を載するを怪むと雖、こは、同雜誌が、あながち、世の風潮に倣ひて、漢文、英文を載するといふにはあらで、從來、漢文、及、英文を讀む者の、譯讀法亂雜にて、其の影響は、延いて、我が國文に及び、爲に、我が一般の文章を亂さむとするを憂ひて、斯くは、漢文、英文の欄を設け、の正確譯讀法を敎ふるなりとぞ。

教の庭

十二月五日兼題　雪中松

天

降りつもる雪にみどりの色はえて
　ふゆがれしらぬ松のけだかさ
長野縣東筑摩郡鹽尻村　河野文子

地

降りつもるみ雪の中にこもりても
　しるきは松のみさをなりけり
府下芝區三田四國町　師岡千代子

人

ふりつもるけさはさながら雪の山
　見るこゝちするにはの松がえ
府下麴町區一番町　高井孟子

すみの江の松につもれる白ゆきも
　千代のみさをは埋めざりけり
青木はる子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

白雪は千とせのいろも見えぬまで
　ふりかくしけりすみの江の松
石井德子

なくとりの聲もうもれてをとこ山
　くれしづかなるゆきの松むら
平野君子

千とせふるときはの松に雪つもり
　鶴のけごろもまとふとぞみる
磯部つや子

菊さきし庭のまがきはうづもれて
　老木のまつにかゝるしらゆき
羽田三緒子

白ゆきのまなくふれゝバ常盤なる
　松のこずゑもいろかはりゆく
羽田たか子

花さきてみのおもしろき松がえは
　ゆきのふるやの軒にこそあれ
佐々有鄰子

ながむれバまつの木ずゑも白妙の
　雪おもげにも見ゆるけさかな
澤田春子

雪ふれバ今朝めづらしく山まつの　徳永萬壽子
　こずゑましろに花ぞ咲きける

うつしゑにとゞめやおかん初雪の　岡　佐波子
　みどりの松にかゝるけしきを

おほ方のこずゑは雪にたわめども　碓井　武子
　みさをたゞしきにはの松が枝

降りつもるゆきの中にも松ひとり　碓井　信子
　しらぬ顔にてみどりそふなり

葉がへせぬ物ときゝしに松が枝は　碓井和可子
　一夜の雪にしろくぞなりける

色かへぬ松のみどりもふゆくれバ　續木　龜子
　しバしみゆきに埋もるゝなり

松の葉のみどりの色もわかぬまで　江馬　信子
　こずゑおもげに雪ぞつもれる

うちよする浪かと見れど白たへの　永井さい子
　雪ふりつもるみほのまつはら

わが宿の通ひ路とてもなか／＼に　磯野　玉子
　友まつがねにかゝるしらゆき

はふ蔦もちりはてぬるをしら雪の　橋本丹江子
　つもれる松はいろもかはらず

降りつもる雪に野山はかはれども　安井　章子
　松こそもとのみどりなりけれ

ふりつもる雪にみどりは埋もれて　安井　龜子
　わが色としも見えぬまつかな

白ゆきはうづむとすれど常盤なる　諏訪　晴子
　松のこずゑのかはるともなし

來むとしのかざしに立し門松も　太田　幸子
　けさはみ雪にうずもれにけり

來む年のかどにたつべき松が枝は　田邊さだ子
　かくるゝまでに雪ぞふりける

雪の中に立ちし常盤の松が枝の　坂口しん子
　木末に千代のいろは見えけり

うもれてもなほ末見する雪の中の　坂口たみ子
　常磐のまつぞたふとかりける

ときはなる松のみさをは白ゆきに　吉田　芳子
　埋もれし后ぞあらはれにける

降りつもるこずゑの雪に色そひて　瀬戸さと子
　いとも床しきにはのひめまつ

ふりつもる雪にうもれしひめ小松
　千年のいろも見えわかぬなり　大橋てい子

ふりつもるみ雪のしたに一しほの
　みどりそへつゝ春をまつらん　檜村美世子

折るゝにも積るみ雪にたわまざる
　まつの操のたかくもあるかな　高野辰子

白雪のふりつもれどもまつが枝の
　たわまぬさまぞけ高かりける　宇多田揚子

白雪の消えてのちこそあらはれめ
　わが住むやどの松のみさをは　植木鋼子

けさ見れど緑のいろもわかぬまで
　降りつもりけり松のしらゆき　梅原ふで子

降る雪に埋もれながらひめまつの
　みさををかへぬ色ぞゆかしき　高橋まさ子

しら雪はふりしきれども常盤なる
　松のみどりはかはらざりけり　藤澤もと子

静なるみさををまつにたもたせて
　ゆきはあらしをふり埋めけり　鳥山龜子

時雨にも霜にもさらにうつろはで
　ゆきにぞ松の花はさきにける　久保田律子

老松と見ゆるもゆかししらゆきを
　いたゞく枝のふかきみどりに　佐藤敬子

千とせふる松のよはひと枝ごとに
　かゝるもしるき雪けしきかな　馬島久仁子

白ゆきはふり埋めどもひともとの
　松のすがたはあらはれにけり　上野かね子

ときはなる松の葉しろくふる雪は
　花にまがひて見るもさむけし　高井米子

千代をへて老いせぬ松も降つもる
　雪にはしろくよそほひにけり　大橋廣江

こずゑまで埋むばかりに埋もるゝ
　雪にもしるきにはのおいまつ　大橋兼子

己が身もかくぞあるべき雪にさへ
　みさをたがへぬ峯のおいまつ　海島定子

ふり積る雪にこずゑのうづもれて
　見なれし松もめづらしきかな　内田たけ子

老いぬるか庭の松が枝ふるゆきに
　みどりの色もうづもれにけり　濱口秀子

いく代へし松にやあらん志ら雪の　神田　春子
枝もたを〻につもるすがたは

たかさごの尾のへの松もふる雪に　濱口　佳子
千代のすがたの老にけるかな

志ら雪は降りかくせども常磐なる　畠山千代子
松のみどりはかはらざりけり

十二月五日雜題

寒夜の讀書

天　長野縣長野町　田邊　貞子

月は久方の空白う冴え渡りて遠犬の聲身にしむ計りなるに軍に出で立ちし夫の身なども思ひわびつゝふと開き見たるは日清戰爭記なりけりあはれ何がしの鋒のすさびにやあらむかきながしたる村雲のけはひいと物すごきに俄にひらめく稻妻の光りにはくづれぬ山もなく碎く百千の雷にはかへらぬ海もあらじかしあはれ勇ましき大御軍をさすがにいみじき手もて物せられたるかなと獨りごつ折しも窓のやれまもりくる高根颪のいと堪へがたきにつけてゝ弋を枕のかりねの夢や如何ならんなど忍び出でられてなん

地　伊豫國宇摩郡土居村　積木　龜子

螢ならぬ燈火明しかゝげて文机の前にはしとね暖く重ね布き手あぶりに埋火の備へもあれど冬の夜の寒さもさむかり身には覺えずひもときし書に向ひて餘念なかりし程にいつしか皆人も寢ねたりとおぼしくて音もせずなかりしもいよ〱心靜けく讀みもてゆく書に心うつりて夜の更くるも知らざりしが夜半ばかりにやと思ふ頃にはかに外の方さわがしく吹雪にやあらん窓うつ音のすさまじく寒氣はげしくおそひ來ていとたへがたくなりぬふと心づきてかたへの埋火かきさぐれどもいつの間に消えにけん火の氣もなくて雪の如き灰のみ止まりたるにいとゞ寒さの增さる心地すれどせんすべなければ又暫し机に向ひてありしがやがて外の方靜かに成しかば立ちて雨戸おし開くるに先づ吹き入る

ゝ冷風に面を打たれて驚きながら猶も庭面を眺むれバ常に深雪絶えぬ片山里も今宵殊に降り積りけん雪いと白く晴れたる空には月影さえて星の光りもいと清らかなりされど寒さは身をきるばかりにて暫しも得たへぬ心地するにもあはれ書讀む窓の燈火に代へていさををを世々に傳へたりし古へ人の苦學のさまは如何ばかりなりけむ唯さま〴〵のうきを堪へ忍びて撓まぬ志によりてこそなど思ひ出でゝは中々に埋火がななど思ひし心の耻かしくて背に汗するばかり暖かくなりぬ實に人は各其心の持ち樣にこそと思ふ折ふし二時を告ぐる時計の音に驚きて臥床に入りしが其夜は殊にあたゝかき夢を結びぬ

人

長野縣長野町　吉田芳子

霜にさえたる鐘の音もをさまり寒さをかこちし人人の聲もしづまりぬ更け行く風夜はいたう身にしみ渡れどひとりすびつに近よりておきかきおこして炭さしろへつゝ文机に向ふにいみしう心すみて晝見しわたりの何心なく過ぎにしも思ひ知られ深き心はへあるくだり〴〵もおのづからとき得られてうれしともうれしあるは思ひ得たる事どもを筆にしあるはをかしきふし〴〵をかき集めなどして肌さむきも覺えずおきの消え行くもしらざりしに折しも板ひさしたゞしる霰の音にやゆめさめ給ひけむ母上の聲していたくもさゆる夜半かなとくいねよかしなど仰せらるゝに打ちおどろきてふしどに入りぬ

佐々有鄰子

明日は月次の試驗なれどかねてつとめてよみ試みつる文卷どもを文庫のうちよりとりいでゝくりかへしいく度となくふく讀なしつるに學の窓の燈かげほそくすきまの風も身にしみていとゞ冬夜ふかくなりぬかゝるさむさをもよそになして明方ちかき鳥がねに此文卷どもをくりかへすも故鄕の空には父母在していかで今度の月次は人々にぬけいでて一の上席をもしめて女はらはの鑑ともなれがしといのりたまふなるべけれたつとめいそしみふく

讀なしてよろしき結果を得べくこそとおもほゆれど身にしむさむさも打わすられてなん

岡　佐波子

昨日今日ふりつゞる雪に庭も間垣も分ちなく一面の白かねの世の中となり日頃は近う見えし山々もそれかあらぬかと疑ふばかりの白妙に夕日のてり渡りていと／＼まばゆかりつるによになりては北山おろしのはげしう吹き來てあたりはひそりとしてはづかに聞ゆるは今吹きくる風に梢の雪の落つる音と犬の遠吠のものあはれにひゞき渡るのみにて寒さも一しほ身にしみてなむおのれからうたくるまでふみよみすさびてありけるにふみ持つ手さへ凍るはかりに夜のふくるまゝに寒さはいよゝ加はりぬれど讀みし事もまた一しほ身にしみたりされどふみ讀まんには冬こそまされと古人のいひおきしもげにことはりにこそ

碓井　信子

吹く風のいとゞ身にしむ冬の夜ひとり書齋にこもりて火桶をかたへに文机に向ひ書をひらき見れはくだり毎にをかしくおのが心にかんじてはあなおもしろしあなめでたしあななつかしなどゝひとりごちしつゝ見もてゆくにいつの間に夜はふけにけんいとゞあたり靜けく定まりていまは鐘の音のみ耳にひゞきまさりぬよし夜はふけぬとも未だねむけ催さゞれどせめては終まで讀みつくさんとなほも燈火にあぶらさしそへあるは火桶をあかくかきなしつゝ漸く讀み終りぬれどあたりに取ちらしたる書どもとりつくろひ居りしにかぞいろの出で來て夜ふかしは身体の爲めいとわろしいざとくいねよかしもし讀みのこしたらんには朝とく起きて讀みなど寒さの身にしむ如くよく覺えつべしなどねもごろにさとし給ひたれバ親の意のまゝ床につきぬ世に寒稽古といふ事の如く寒さのうちは朝にまれ夜にまれ書讀む身に取りてこよなき節にこそありけれまして寒夜は擣衣の音あるは遠寺の鐘のきこゆるなどかへりて身にしみあはれ深く心しづまりてよくてなむ

橋本　丹江

日々學校よりかへりきてはつねにおほごゑあげてふみよむはかき一つへだてしとなりのうなゐこにて年は十ばかりにやあらんしずかにふゆの夜さむとてこのころははゝにやいだかるゝいねやしぬるひるのみはそのこゑをきけど夜はたえておともせずこよひはもはや冬のも中月は中そらにさゑてしかも秋のいろにあらず池におつるかけひの水おとさむくして水鳥の立ゐひまなしまどとざしておちばのおとをよろにきゝつねにいとしたしうする文二つ三つふづくゑのもとにとりてさてよむよはふけゆくかをり〳〵うごく板戸のおともきこえ風もらぬにさむさそことに身にはしむるおそきをつぐるかねのこゑいとさえわたりてものすごしをりしも例のとなりのうなゐご何事にかおびえけんその母のなくさむるこゑさへきこゆ夜もふけたるなるべしと時計うち見やればあくる日といふ二時になんありけるさてもおもしろきふみよ夜のふくるもしらでと いひていぬこの文なん大かゝみなりける

太田　幸子

寒さをかこつ犬の聲に目覺まされつゝ獨り火桶近うはひ寄りて古へ今の事共思ひめぐらすにもあはれのみいやまさりてやまねバかゝる夜にしもふみは讀むべしとてかきひろげぬるは源氏桐壺の巻にぞありける帝の御なげきは八重雲のいと深う晴やらねば一夜靱負の命婦もて更衣が母へ御言たまはるなりけりあはれ夕月夜のをかしく染め出だせるむらさきの筆のあやには身の寒さも打ち忘れ立ちまじる心の花には夜の更くるも覺えで古への跡を尋ぬるだにあるをまして泣き渡したる淺茅生の露ゐは別け入る袖もぬるゝ心地せられていよ〳〵あかずはなれがたきにいつしか長きをたのみし冬の夜も明け方近く成りたらん霜に冴えたる鐘の音ひゞき渡りて有明の月かげ板戸の破れ間にさし入りぬ

檜村　美世

頃しも神無月の末つかた天地も氷るバかりなるいと寒き夕獨り文案により一穗の燈火を友となし心

静かに文讀めど節女貞婦の言行より女子諸般の心得に至るまで文の上にあらはれてまのあたり見聞くか如くいと心地よくうれしかりける折しも風はすさひて梢に鳴りみ雪はちりて窓を打ちしづやしづと歌ひし貞女の昔も忍ばれて更け行く夜半の鐘の音も何となく哀れに聞えてなん

宇多田やう子

七重八重雪のふり積れるに月すみ渡れる冬の夜はさなから晝をもあざむきてわか學ひの窓の燈火さへ影を失ふ斗りなるにさすかかの孫康の事も思ひやられ寢ねずひもとく數卷の書に夜もいたく更け渡りけん吹きすさひつる木枯しの風打たえてみぎはに遠く水鳥のこゑいとしげく鳴きさわぎぬ

島山龜子

すゝみゆく世のうれしきはまなびの窓に雪螢をあつむる人もなくてともしびの光に埋火の灰かきおこし寒き冬の夜をもよそにして我國のはさらなり遠き外國の書をも心のまゝによみ得るなりけりされどむかしの人は雪のひかりにも机にあまるたかりの書ら讀きはめて身の光ともなしつるを我がくらき心には此のあかき燈のひかりにてもたど〳〵しげなるはいかなる事にかと思へど埋火のもとにはあれど猶身も寒き心ちぞせらるゝもろこしの何某とかいへる翁は「讀書三冬猶用ゐるに足ると」いひしと聞けど讀むかひもなき身こそいとくやしかりけれ

門田八重子

たそがれの頃より北風の雪を吹き送りて窓をうつ聲のいみじければ窓をかたくとぢて日ごとにおはせられし書を獨りよみ居けるうちにあら〳〵しき風もやみ久方の天も晴れ渡りてもの音さびしくしめやかにして轎馬の聲さへも打たえて氷りさゆる寒さ人の身に徹るばかりなり課書も已によみをはりてきのふ國光社より送りこしゝ女鑑七十一號より二三號と讀みゆけば論説漫錄史談文林等何れも堂堂たる正論にして愉快なりそが中に史談の武田勝賴の夫人吉村れつ子百合子等より花ふゝきの續きを探りよめばとり〳〵にたぐひなきいみじき

ふるまひ實に烈女賢婦の行ひ女子たる者かくこそあらまほしけれと感涙そゞろに出で來ぬ終に長き夜もふけゆきて隣のにはつとりの曉をつぐるにおどろき空はいかにと窓をうちひらき見れば影すさまじき月の雪にうつりていとゞ寒さゝを覺えければいそぎふしどに就きあくるをも知らずいねけり

十二月廿日兼題
歌……埋火
文……光陰を惜む說

二十八年一月五日兼題
歌……寄松祝
文……貴賤迎春

注意

來二十八年一月五日發行女鑑第七十八號の兼題歌文は今月二十五日をもて〆切とす

明治二十七年月並兼題

	五日 歌	廿日 歌	文	文
一月	寄松祝	鶯告春	貴賤迎春	伊勢詣の記
二月	小式部内侍	歸雁	梅を見て	赤十字社へ入社を勸むる文
三月	春海邊	早蕨	入學を祝ふ辭	うれしきもの
四月	雨後花	水邊山吹	春の山ぶみ	女子の衛生
五月	竹亭夏來	薄暮松風	端午の文	幼稚園を觀る記
六月	聞水鷄	夏夜	春日局	暑中見舞の文
七月	蓮	夕立	靈祭の詞	海水浴
八月	秋扇	女郎花	雜誌を讀む	夏期休業の感
九月	月夜琴聲	祇王	秋草を見る記	秋懷のことば
十月	鹿聲幽	神嘗祭	菊を贈られたるかへし	女の心得
十一月	殘菊	寒草帶霜	羈中の時雨	の添削を乞ふ文
十二月	氷初結	梅花先春	辭之前の事を記す	歳暮

投稿心得

兼題歌文は婦人は何人にても隨意に投稿することを得但一週日前に本社に屆くやうせらるべし

送稿者は宛名を國光社編輯部とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙形を用ゐ文字は鮮明に書かるべし特に投稿者の住所姓名を詳に記さるべし

投稿歌文中より天地人の三首を撰り天に三部地に二部人に一部女鑑を送呈す又すべての歌文は原稿著者に女鑑教の窓に掲載すべし

（明治二十四年八月八日內務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）
發行兼印刷人　川﨑直衛　編輯人　山根勇藏
發行所　國光社

征清軍紀念碑設立廣告

今回大阪府下河内國讃良郡飯盛山下四條畷別格官幣社贈從三位小楠公社地内ヘ征清軍紀念碑ヲ設立ス有志ノ諸君ハ陸續御寄付アランコトヲ

一銃劍ヲ模シ高サ五丈トシ中空ノ鑄造ニシテ全部ヲ金箔塗リトナシ表面ニハ征清軍殉公之紀念ノ八字ヲ鐫刻シ礎臺ハ花崗石ヲ以テ組立テントス此ノ經費建築概算ハ一萬四千圓

一成功期限ハ本建築ノ難易如何ニヨリ長短ノ別アレトモ二月ヨリ起工シ五月三日小楠公五百五十年祭迄ニ竣成セントス

一贊成金ハ可相成來ル廿八年一月中ニ御寄贈有之度事

明治廿七年十二月

發起人　西村拾三

贊成人　辻新次
　　　　西澤之助

事務取扱　森敬一郎

本事務ハ東京々橋區築地二丁目廿一番地國光社森敬一郎取扱候間御書通ハ同人ヘ宛御差出被下度候

三輪田眞佐子著

女子の本分

全一冊

右十二月二十四日より發賣可仕候

定價金貳拾五錢也地方は郵送税金六錢也

但國光社協賛員並に國光又は女鑑購讀者各位には定價金の二掛割引(即金貳拾錢)を以て發賣可仕候

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

女鑑第七十五號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年十二月十二日印刷
同年同月十三日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社